ISSN 0910-3090

國語國字

國語問題協議會報
平成二十三年七月一日發行

第百九十五號

目次

第八十六回講演

國語と國の守り……本村　久郎　1

第八十七回講演

競技かるたの歴史と美しい讀みについて……稻葉　修至　19

國語と外國語について……佐藤　優　32

會員寄稿

國語問題の變化と變質（一）……若井　勲夫　52

漢字表による字音語表記の破壊……上田　博和　59

鈴屋學會と假名遣……中澤　伸弘　63

「歌會始」・金のさざ波……大喜多峻一　67

・大丈夫（契沖顯彰短歌大會と今年の歌會始）……吉原　榮德　68

小泉八雲と國語―假名遣ひ、漢字、健全なナショナリズム……前田　哲男　70

聖書に於ける國語問題（其の十一）……松岡　隆範　73

假名字母の制限……上西　俊雄　75

東日本大震災鎭魂の歌……78

和歌・嚴島……安東　路翠　80

後書……谷田貝常夫　81

題字・挿書　近藤　祐康

國語と國の守り

本村久郎

今御紹介に與りました本村でございます。

私は國語を教へてゐたといふより、「指揮とは」とか「統率とは」とか、さういふものを教へて來ましたので、それを通じて、いろいろ感じて參りました。

今回は專門家の方の前で話すといふことで、釋迦に說法になつてしまひますが、聞いていただきたいと思ひます。かつ、今日の話は、言葉の問題の上で、日本の國柄といふか、日本とはどういふ國なのかといふことを、歷史的に見て、おさらひをしてから、現在における安全保障を行ふ上での狀況、研究狀況といふか、言語空間といふか、そして、私が防大で學部長として教へてゐたときの學生の狀況を、これはまた、全般的な學生に通じると思ふのですが、さういふお話をさせていただきたいと思ひます。

最初にレジメの中に、必要な項目だけですが、書いてありますので、目を通していただきたいと思ひます。

日本の國柄といふか、どういふのかと言ふと、この萬葉集の山上憶良の歌、これに盡きるのかなと。

神代より言ひ傳て來らく
そらみつの倭の國は
皇神の嚴しき
言靈の幸ふ國と
語り繼ぎ言ひつがひけり

この二つのキーワード。「皇神の嚴しき國」とは、萬世一系の天皇家が治める國である。もう一つは「言靈の幸はふ國」といふことで、やはり日本人は言葉に發したことは取返しが付かない、言葉に發したことは實現されてしまふ、といふことで、言葉に對して愼重になる傾向がある。

逆に言へば、いい言葉を使へば幸はせな國になる、といふところから、言葉といふものの性格が出來て、それが日本人自體に影響してゐるといふふうに思ひます。

日本は環境がいいといふか、非常に自然に富んだ國で、その中で、自然信仰が生れて來たのかな、と思ひます。

それに、外の民族に支配されることもなく、神話時代から續いてゐる皇室といふのは、世界に類がない、これが日本の國柄で、まさに奇蹟だと考へてをります。

さきほど申しましたやうに、日本の國柄の大きな特徴だと思ひます。

聖靈信仰とかアニミズム信仰といふのは、自然と人間の和の境地の根源であつたと思ひます。ですから、自然すべてに靈性が宿り、言葉にも言靈といふ靈力が宿り、發せられた言葉の内容どほりが實現するといふことになります。

したがつて、和語、大和言葉といふのは、自然にかかはる語彙が非常に豐富で、また、人間は自然の中の一部といふことで、自然との調和を生活の中で重視してまゐりまして、和が尊ばれる、これが日本の國柄と思はれます。

ぢやあ、どうやつて日本語が發展して來たかと言ふと、これは、釋迦に說法でございますが、最初は文字はなかつたと言はれてゐます。應仁紀に、百濟王が王仁を通じて、論語、千字文と言はれますが、まあ、千字文はその後に作られてゐますので、千字文に似たもの、さういふもので言葉を傳へたと言はれてをります。

この漢字の國字化による文字言語、この創始者が王仁と言はれてゐます。

檀國大學といふ韓國の大學の教授の金容雲（キムヨンウン）といふ方は、阿直岐（あちき）や王仁たち百濟人は、百濟語で話し、漢文は百濟式訓讀法で讀んでをり、漢文を自らものにする爲には、假名や訓讀が必要だつた、と述べて居ります。そのあと、雄略紀には、百濟人が作つた鐵劍銘があります。

ここに書いてありますやうに、關東の稻荷山古墳とか、九州の江田船山古墳から出た鐵劍には、兩方とも、獲加多支鹵大王（ワカタケルノミコト）といふ名前が入つてをりまして、その後の說明で、七代前の先祖から大王に仕へて、獲加多支鹵大王に至つた、と書いてあります。

したがつて、當時は百濟人の影響が大きいといふか、韓國人の教授によれば、百濟語と和語は方言の差ですから、聖德太子とか直接、百濟人から教育を受けても、理解することができた、と教授は書いてゐますし、韓國語を聞いてゐても、非常に似た言葉がありますし、韓國があのやうな方向に音讀一つになつたのは新羅のせゐです。新羅がさういふ方向に走りました。

そのあと、日本人は、外から來たものは素晴しいと思ふ傾向がありまして、最初は古事記は言ひ傳へで作つたのですけども、その漢字を表音化して、これが日本人の獨特の漢字の捉へ方だつたのです。

一時漢字の影響はなかつたのですが、遣隋使とかが始まりまして、漢語中心、漢文重視になりまして、そして遣隋使が廢止されて、その後、土佐日記とか、大和言葉を使つて、漢文で書く内容を大和言葉を使つて書くやうになりまして、源氏物語になつてきます。室町になるとまた外國の文獻といふことで、漢

文を使つて、といふふうに、揺れる傾向があります。

戰國時代は外國の文獻、また漢文中心になつて、鎖國して、今度は國學の時代。明治維新になつて、これまでは中國が文化の中心だと思つてゐたら、西洋だ西洋だ、といふことで、一時、明治には、漢字を廢止しようといふ運動まで出て來ました。

しかし、明治維新で、結局口語化と標準語化を行ひました。そのときは、非常に歐州語に對する造語が殖えました。明治維新までは、漢文的な素養をこやしとして、和文譯の世界を充實させてきた、と考へてゐます。これが造語を作る力になりました。

しかしながら、維新前夜、近代郵便制度の創設者の前島密等が、漢字廢止だといふことで、漢字は難しいから、やめてしまへ、アルファベットにしてしまへ、と主張しました。ローマ字にしてしまへ、といふふうな、戰後に起つたのと同じやうな狀況が明治にもありました。

しかしながら、やはり日本人の素晴しさといふか、幕末から明治維新にかけて、非常に造語を作りまして、西洋文化を吸收しました。また、隨時、造語が適切かチェックしてきた、といふふうに考へてをります。

ただ、漢字を廢止しようと思つたのは、西洋文明、近代文明に對して、技術などに對して、非常に驚きを感じたといふことです。西洋列强の植民地化政策に對して、自分たちも同じやうになりたい、と共感した、といふのが、これが漢字廢止の根源ではなかつたかと思ひます。

米國は戰後、占領政策の一環として、漢字假名を全廢して、日本人にローマ字を使はせようとしましたが、その第一段階として、漢字の使用を制限して現在に至つてゐるわけでございます。しかしながら、科學の發達のおかげで、ワープロといふものができまして、一時期非常に漢字制限の勢ひが强かつたのですけれども、このおかげでどんなものでもルビを付けられるやうになりまして、また、國語の復權の時代に入つてきたのかなあ、と思つてをります。

因みに、韓國は一九五八年に漢字を廢止しました。拓殖大學の呉善花教授はその著書『漢字廢止で韓國に何が起きたか』の中で、「韓國語の七〇%は漢字語である。漢字排斥がもたらした最大の弊害は、したがつて、韓國語では日本語と同樣に、概念語や專門用語の大部分が漢字語であるのに、漢字の知識および漢字映像の助けによつて、それらの言葉を驅使することができなくなつたところにある。そのため、韓國人は、抽象度の高い思考を苦手とするやうに

なつてしまつた」と述べてゐます。韓國語の七〇％を占める漢字語をハングル文字にしたので、同音語彙が殖えたため、難しい同音語彙が使はれなくなり、相互に理解できる語彙が大きく減りまして、今の韓國人は難しいことが話せません。非常に生活的な用語しか使へないといふことで、抽象語を話すことが非常に苦手です。ですから、議論をしたときに、非常に感情的に、冷靜に考へられない、といふ傾向が今の韓國人の方にはあります。

私どもの學校にも韓國の軍人が留學して來てゐます。さういふ人と話すと、非常に言ふことが單純です。從つて、今、韓國人の學者で頑張つてゐる人は、韓國語以外の言語力がないと世界に通用しない。したがつて、とくに、理系はいいのですが、文系的なところ、政治とか歷史とかは非常に劣るといふふうに言はれてゐます。實際に、外國では、韓國に關する歷史學に於ては、韓國の歷史學者は認められてゐないといふのが現實でございます。中國も一緒で、簡體字といふことで、六十年前のものが、韓國の人も中國の人も、自分の國の文獻が讀めなくなつてゐます。

さういふことで、歷史が失はれてしまつたといふことになつてゐるわけです。ただ、臺灣はそのまま正字を維持しましたので、過去の文獻も讀めるといふことで、世代間の價値が共有されてゐます。

したがつて、中國の方は、歷史は、共產黨から教へられた歷史しか知らない。コントロールするには文字を忘れさせるのが一番だと思ひます。

日本も、最初は一九〇〇語くらゐに漢字を制限されましたが、少くとも重要な漢字は殘つたので、なんとか過去の文獻もある程度讀めるし、その點は非常に良かつたのかなと思ひます。

日本語の素晴しさは、歐米の言葉より何がいいかと申しますと、日本語といふものは言靈信仰にありますやうに、言葉を大切にし、和を尊ぶといふ本則を變へることなく、大陸から、宗教とか技術とか統治制度を取入れてまゐりました。

その中で漢字を吸收しつつ、文字のなかつた和語を表記するために漢字を利用しました。さらには平假名、片假名を生み出しました。

これによつて、和歌短歌俳句といふ和語の言語文化を維持させつつ、和語と漢語を融合させてまゐりました。

その融合の過程で、和語は情緒的、漢語は論理的に使用するといふふうに、ある程度區分けをされてゐたのではないかと思ひます。

この一つの言語に二面性があるといふのは珍しい言語であると思ひます。

和歌の世界と漢文の世界といふことで、一つの言語に、二面性を以てゐる非常に珍しい言語であると思ひます。

その中からどんな特徴が出て來るかと言ふと、情感が豐かになるといふことです。自然が豐かですから、言葉の中で、例へば、和歌は五七五七七、俳句では五七五の中で、少い語彙で廣い情感の世界を表現してゐます。これは非常に素晴しいことだと思ひます。

かつ、用語も曙、朝ぼらけ、霞、五月晴、お濕りとか、かげろふ、入梅とか、外國にはかういふものを一言で終らすやうなことはできません。

さういふものを使ひ分ける情感が備つてゐます。

特に、味に關しては、日本人は非常に豐かに表現しますが、外國では單純ですね、

とくにアメリカ人なんかは甘い辛いしよつぱい、終りといふことで、旨味とか、さういふのが全くない。アメリカに留學したときに、泣きさうだつたですね。二度と行きたくないですね。

日本人に生れてよかつたなと思ひます。

それから、漢語によつて、儒教と佛教を傳へられたので、漢字によつて、非常に大きな、抽象概念を持つてゐる。

ですから、明治維新の日本の近代化。あのときは、みなさん、英語も、ドイツ語も、フランス語も話せなかつたのですが、留學した方は、數年で完璧な語學を話して、それを導入したわけですが、それは、それ以前に漢文等で非常に抽象概念があつたから、といふふうに考へてゐます。

ですから、戰後の經濟復興もさうですし、ノーベル賞學者が出て來る所なんかは日本人の高さ、漢字で意味を知るといふ、シンボルで考へるといふやうな所が、日本人の腦の發達によかつたのではないかと。

これも非常に珍しいのですが、外國語の吸收力と造語力が高い、といふことです。

最近は造語せず、そのまま片假名を使つて歐州の言語を表音表記するやうになりましたが、幕末から留學が始まりまして、歐州の文明に據る近代化を進めたときには、明治維新のときには、漢字で多くの飜譯を致しました。

たとへば、society とか、ドイツ語では Gesellschaft とかいふのは、江戸時代から、「世間、世の中、浮世」、その後、「會社、仲間會社、衆人結社、人間會社、人間仲間、世俗、衆民會合、人間公共、公社、交際、世態、社會」、最終的には「會社、交際、世代、社會」となり、最後に「社會」

といふ言葉が殘つたといふことです。

あと民主主義とか、今中國で使つてゐる言語は、全部、明治維新で作られた言葉だといふことは御存知の通りです。

かつ、直接外國語を日本語に直譯するんですね。特にドイツ語なんかは、科學の用語が、たとへば哺乳類といふ言葉、これは直譯です。

ドイツ語でゾイゲンティーレ (Säugentiere) と言ひます。ザウゲン (saugen) といふのは、「吸ふ」「哺乳する」といふ意味なんですが、ティーレといふのは動物といふ意味ですから、まさにそのまま直譯です。

氷山といふことばもアイスベルク (Eisberg)。そのまま漢字を當てはめてゐるわけですね。

神聖ローマ帝國といふのがあるんですけれども、これも、ダス・ハイリゲ・レーマニッシュ・ライヒ (Das HeiligeRömanische Reich)。

そのままの譯ですね。ハイリゲは「聖な」といふ意味です。レーマニッシュはローマのこと。ライヒは帝國です。

あるいは「止揚」といふ言葉は、aufheben とかのそのままの意味を、漢字を使つて飜譯したのです。

もう一つは、日本語は語彙數が非常に多いといふことです。

語彙數は多いので表現が精緻であり、文字は少くて濟むのです。一つの漢字を中心とした他の漢字との組み合わせで、共通する概念を持つ語彙グループを持つてをり、多くの語彙を覺えやすいと言へると思ひます。そのはうが意外に效果的かなと思ひます。

外國の本は非常に分厚くなります。同じ內容でもですね。例へば、歐米で、話の內容を、あるいは本の內容を八〇％を理解するには、スペイン語・英語・佛語で約四〇〇〇語で濟むんですけど、日本語では五〇〇〇語が必要です。九五％理解するには、歐米では五〇〇〇語で充分ですが、日本語では二二〇〇〇語必要です。それだけ非常に區分された語彙數があるといふことです。

もう一つは、內田樹（たつる）といふ先生が「日本邊境論」の中で、「漢字は表意文字、假名は表音文字で、表意文字は圖像（づざう）で、表音文字は音聲です。圖像と音とを竝列處理しながら言語處理を行つてゐる」、したがつて、非常に記憶に定着しやすい、といふことです。

例へば、失語症などのときに、日本人は外國人に較べて失語症が少い。といふのも、外國語はほとんど音ですので、

それを失つてしまつたら、もう理解できないが、日本人の場合は圖で感じますので、しやべれなくなつても本が讀める。

日本人の思考力が高い理由の一つといふふうに私は考へてをります。

で、ここで問題なのですが、國語力がなぜ大切かといふと、これは、國の守りの基本だと思つてをります。

何かといふと、國語によつて國が豊かになるし、未來にわたつて存續して行く爲には、その國の國語がなくなつては存續して行けないわけです。外に對しては、外交力とか軍事力が必要ですけれども、內なる守りとしては、基盤としての國語力が非常に大切だと私は思つてをります。日本は資源がないのですから、生き殘つて行くためには、人材を資源にするしかない。

明治維新によつて近代化が成功したのも、識字率の高さと、それにともなふ向學心、好奇心の高さであつたと思ひます。

御存知かも知れませんが、江戸時代、日本人の識字率は五〇%でした。

しかし、當時、ロンドン、大英帝國は二〇%の上流階級のみが、文字が讀めました。一般庶民は讀みませんでした。歐州列强が幕末に來て、日本人がみんな本を讀んでゐるのをみて、この國は植民地にはできないと考へたさうです。

國語力の高さは文化の高さでございますし、文化の高さが一種の抑止力として働いたのかなと思ひます。

ですから、彼らは積極的に日本を植民地化しようとはしなかつた。といふよりは、怖かつた。これはちよつとやらうとしても、やれなかつたんぢやないか。軍事力でなく、人間の質の高さで恐れさせたのかなと思つてをります。國語力を高めれば、教養が高まりますし、世界から敬意を持たれる國になるのですが、さきほどのお話のやうに、うちのトップの言語力が低いといふことで、今敬意を失ひつつあるのかなと心配してをります。日本語を守ることは國を守ることです。

紀元前五八六年にディアスポラと言つて、ユダヤ人が離散してしまつた。ただ、なぜイスラエルが、戰後一九四八年に再び建國できたかといふのは、紀元前五八六年から、ヘブライ語で書かれたタルムードといふ書物を、ずつと子供に暗誦させ續けた。といふことで、ヘブライ語がなくならずに、國がもう一度パレスチナの地に、獨立できたのです。したがつて、逆に言へば、母國語を失つた民族は文化的に滅びてしまふといふことです。

これが國語はうちの守りであるといふことの一つの證明です。

最近は教育漢字の制限とか、國語の教育時間の削減とかいつて、國語教育輕視と、それから、小學校での英語教育といふことをやつてます。これはまさしく愚民化政策だと思つてをります。歐州列强の植民地政策の一番のポイントは、文字を教へない。そして、本來の母語を驅逐することなのです。ですから、日本の現在の國語教育は歐州列强がやつた植民地化教育と同じことをやつてゐる。日本人みづからが日本人を消滅させようとしてゐるのではないかと私は考へてをります。國語の時間は昭和十五年には十二時間だつたのですが、現在四～五時間、約三分の一です。歐米では日本の倍以上の時間を國語にかけてゐます。

平成十七年に「ベネッセ教育開發センター」の「國語學習に關する調査」の中で、日本人間で正確な意志傳達ができなくなつてゐる、と報告されてゐます。

英語教育專門家の意見を紹介しますと、英會話教室を主宰する橋本伸一さんといふ方が、「親が英語を學ぶか、しつかり日本語を教へなければ、親子の會話さへ成立たない」と言ひ、日本で最初の英語漬け教育を導入した加藤學園暁秀（ぎやうしう）學園の佐藤誠一副校長は、「闇雲に英語に漬けるのではなく、日本語をしつかり身につけさせるのが前提」と言ひ、豫備校英語講師の森內真紀人先生も、「英語が仕事上あるいは生活上必要な人は、一割にも滿たない。外國語の修得は必要なときに集中して學習した方が效果がある」と言つてをります。

保護者の七割が小學校で英語を教へてくれと贊成してゐると言ひますが、この輿論を根據に、平成二十三年度から英語が必修化されます。これを非常に危惧してをります。だいたい、贊成した保護者の方は、ほとんどの方は自分が英語ができない。だから、若いときからやるとバイリンガルになれるのではないかと考へてゐるんですね。ところが實際には家で話せませんので、バイリンガルには絶對になれません。おまけに、母國語の能力をのばせません。母國語のレベルが低い人は、絶對に外國語は高くはなりません。母國語が五〇％で、英語が五〇％の人は思考力は一〇〇％にはなりません。五〇％です。

そのへん誤解してゐるんではないかと思ひます。

私は昔、今の東京醫科齒科大學のエミ・シンチンガー助教授に、防大生のときに、辯論大會に出る前に指導していただいたことがあります。發音、文章をですね。

お父さんは學習院大學教授のドイツ人のシンチンガー先

生です。お母さんは日本人です。ドイツ語も日本語も完璧です。まさにバイリンガルです。

私は、「何語で考へてゐるの」と聞いたんですが、彼女は、「ドイツ人學校へ行つてゐるので、私はドイツ語で考へてゐる。數學もすべて論理はドイツ語。話すときに、自分で、自動的にトランスレート出來るんで、それで日本語で話してゐる」と言つてゐました。

兩方で考へるといふことはほとんど出來ない。どつちかの母語がしつかりしてゐないと。彼女にとつては、ドイツ語が母語として育つてゐるわけでございます。

一方、前の駐日獨大使館の駐在武官は、私がドイツにゐたとき、お世話になつた將校なのですが、奥さんは日本人です。でも、子供は全く日本語がしやべれません。二人とも。それは親の教育の仕方なのかも知れませんけれども、さういふふうな非常に對稱的な家庭を見た經驗がございます。

自衞隊も留學する機會が出まして、非常に英語が堪能な者が多いです。ネイティブに近い者もゐます。これは、自衞隊に入つてから初めて必要に驅られて、必死でやつたから身につくのです。そこが自衞隊の教育の素晴しい成果だと思ひます。

私ごとですが、私の息子も同じやうに戰鬪機乘りになりたいと、上智大學から自衞隊に入つたのですが、そのとき、操縱課程に入ることができまして、二年間向ふの空軍、米空軍で訓練を受けて、一昨年の十二月に歸つて來ました。行く前は、TOEICの六〇〇點くらゐしかなかつた。二年間で八五五點くらゐになつて、英語力が完璧になつて歸つてきたので、負けたなと思ひましたけれども。

自衞隊は英語が非常に必要ですので、さういふ意味では職業としてサバイバルになる。それの方が身に着く。適當に今、英語學校、塾、あんな所に行つても、全然上らないと思ひます。お金の無駄と思ひます。必要なときに集中して二十代に勉强すれば十分だと思ひます。で、かつその、自慢でございますが、私の息子が米空軍で操縱訓練を受けたのは三十五人のコースでした。日本人はふたり、三十三人はアメリカ人。米空軍協會賞といふ最優秀賞をもらつて歸つてきたといふことで、努力すれば、何とかなるものだと感じてをります。

國の存續になぜ國語力が大事かといふことをもう少し御話させていただきたいと思ひます。

國民としての精神文化の繼承ではないかと思つてゐます。

上杉鷹山が、「國家は先祖より子孫に傳へ候國家にして、

我私すべきものにはこれなく候」と述べたやうに、先祖が築いて、現在の我々を經て、子孫に傳へるべきものが、歴史であり、愛すべき日本である。皆さんもさう考へられると思ひます。

國民といふのは過去現在未來にわたつて連綿として續いてゐる國の精神文化を引繼いで行く人々だと思ひます。國民といふのは、今生きてゐる人ではなく、歴史上の精神文化を續けて來た、全員が國民ではないかと考へてをります。精神文化を承繼ぐ爲に最も大事なものが國語です。日本語です。國語を中心とした精神文化が斷絶したときに、その國民は滅びる、と考へてをります。藤原正彦先生が言はれてをりますが、國語は祖國ではないかと考へてをります。

南米に移住した日本人の三世はもう日本人ではなく、米國人であり、ブラジル人であると考へます。逆に、日本で生れた他民族の人は日本人といふふうに思ひます。

日本人として、自分達の文化に、誇りと自信を持つて、初めて世界から敬意を受けられる。最近、外國へ行つて、日本のことを惡く言ふ日本人がゐますが、そのやうな人たちは、外國では相手にされません。信用されません。自分の國を愛さない人間は、他國に敬意を持つはずがない、と外國の人は考へてゐます。國歌を歌はない、國旗掲揚で立たないとか、さういふ日本人は、外國では、全く相手にされない。ですから、日本語の素晴しさを知つて、日本人として祖國に誇りと自信を持つことが、國際人としての基本ではないかといふふうに思ひます。

アメリカに行つたときも、「僕は山本五十六のファンだ」とかいふ人がゐました。非常に日本の文化を勉強する外國人がゐます。

ニミッツさんも、御存知のやうに三笠を復興させるときに、私は、東郷平八郎を尊敬してゐる。若い時に會つてものすごく緊張した、と言つてをります。

國語がなぜ大事かといふと、もう一つは、思考力と理解力の根本ではないかといふことです。

人材資源大國になるといふことは、オリンピックや世界選手權で活躍する人材を輩出することではなく、技術立國を支へる人材と、幅廣い視野を持つて、政治經濟の面で、國家に貢獻できる人材を育てることではないかと思ひます。

そのためには國語力、言語空間の廣いことが條件で、言語空間の廣さによつて、思考の細分化がなされるのではないかと思ひます。かつ、それによつて、深い思考ができて、かつ想像力、理解力もできる。ですから、語彙空間とか言

語空間が狭い人はその範圍でしかものが考へられません。

今の韓國の人がさういふふうな狀況に陷つてゐます。數學や物理を理解するのも、國語力で、概念力がないと、理解出來ないといふことで、日本語は語彙數が多いといふことが、技術力やノーベル賞受賞者の多い理由であると考へてをります。

三つめに大事なことは、日本人としての豐かな感性。根本である。その、民族的色彩の著しい言葉と言へば、「イキ、もつたいない、懷かしい、やるせない、仕方ない、義理人情、世間體、先輩後輩、爽やか、蟬時雨、コツ、肌合、風情、頑張る」など、日本人の意識と行動特性に結びついた單語が多いといふことです。かういふ言葉は外國にはございません。

日本人獨特の言葉ですね。これが、日本文化に見られる纖細さと關係してゐるのかなといふふうに考へてをります。隨つて、日本と言ふ國柄、自然環境の中で、心安らかに生きて行くためには、日本人の感性を持つことがもつとも自然ではないかと思ひます。

その感性を持つためにも、豐かな日本語力は缺かせないと思ひます。

最近の日本の殺伐さはその邊に原因があるのかな、といふふうに思ひます。たとへば、リラックスといふ言葉、これ、日本語でパッと合ふものがない。なぜかと言へば、元來日本は自己主張する國ではありません。外國は自己主張の戰ひですから、それから離れて、リラックスしたい、と思ふのですが、日本では、もともと、ふだんからリラックスしてをりますから、リラックスといふ言葉がない。最近では殺伐として、リラックスしませうとかいふことが出て來てをりますが、本來さういふものではないかと思ひます。

今度は、日本文化の弱點といふことなのですが、このへんが大きな問題になつて來るのですが、東工大の名譽教授の芳賀綏（やすし）先生が、「日本人は凹文化の民族で、穩やかで、內氣で、物事に徹底せず、眞面目できめこまかいスケールの小さい人間の集りだ。內的、忍從、和合、現實適合、集團維持志向、柔の文化だ。一方、歐米は凸の文化で、しぶとくしつこくタフな神經を持つて、外向的對立、原理原則、目標達成志向、剛の文化である。朝鮮半島以西はユーラシア大陸全體に凸文化である。先進國で凹文化は日本だけである。凹文化のアメリカインディアン、中南米のインディオは凹文化で、文字を持たなかつたために、その文化はほとんど絶えた」とその先生は言つてゐます。まさにそのとほりだと思ひます。

賀茂眞淵の、日本人の美質としての「柔しき心」といふのが、ずつと日本の中で保たれて來たのかなと思ひます。したがつて、日本人は人との對立を非常に嫌ふといふことです。日本の凹文化は、對人意識、人間關係にとりわけ顯著に出てきます。しかし、凸文化は日本人の察しの文化は全く通じないんですね。「よく解る」といふ文化は全く通じません。

神戸女學院大學の內田先生も、「日本人は邊境民がその地政學的地位ゆゑに開發せざるをえなかつた『學ぶ力』が、日本文化とその國民性の深層構造に鳴り響いてゐる」と言つてゐます。そして、「外來の概念や術語をその都度、權威として、正統の地位に置いて、これを口語の土着語のうちに引き取つて、生活に密着した、人の肌にぢかに觸れても、大丈夫な言葉に飜譯する努力を營々として續けて來たからです」と述べてゐます。

このやうな所から、日本文化の弱點がございます。一つ目は外交下手。

我が政府もさうですが、元防大教授の孫崎享先生が、「日本外交　現場からの證言」といふ本の中で、「昔から日本の外交は異文化とのギャップに無關心だつたため、失敗もしましたが、戰後の日本外交は、とくに、想像力、讀心力が不足して、『日本は善意の國です。惡いことは考へません』の一點ばりで友好が實現できるといふ單純な思ひ込みが目立つ」と述べてゐます。仲よくしませうと言つてゐればいいんだ。さうしたら向ふも理解してくれるんだ、さういふ外交法を通して來たといふことです。

外交といふのは言葉による戰爭ですので、外交も通商も驅け引きです。驅け引きをマイナスのシンボルとする對外意識が、外交には阻害要因になつてをります。

ある國際會議で日本の代表が、「何分とも宜敷くお願ひします」と挨拶しました。よく言ひますね。この時に、通譯が、フランス語で何と言つたらよいか解らないといふことで困惑した、と言ひます。獨特の日本人の表現ですね。

これをイギリスの社會學者R.P.ドーア教授は、人情的な計らひを先方に期待できるといふことを前提とした安心感を先行させたこの常套句を「甘えさせて下さい」といふ挨拶だと評してゐます。

したがつて、日本人は凸文化に對する交涉術を、攻擊的な交涉術を理解できてゐない。かつ交涉において、問題に正面から對處する緊張に耐へられない。どこかのトップみたいに言ひ分けばかりしてしまふ。問題を先送りして、考へることをやめてしまふ。

そのために、問題がどんどん擴大して、解決がますます難になつて、思考停止に陷ります。

歷史では、幕末交涉や先の戰爭に關はる經緯がその典型的な例です。考へればまさに、甘えの構造だといふふうに思ひます。

それと山本七平さんが『空氣の研究』で言つてゐる『空氣』です。

「『空氣』が支配する意志決定といふことで、戰艦大和の出擊について、聯合艦隊司令官の戰後の言葉はどうか。『戰後、難詰する輿論に對しては、私は、當時のああせざるを得なかつたといふ以上に辯述しようと思はない』であつて、いかなるデータに基いてこの決斷を下したかひは明らかにしてゐない。それは當然であらう。彼が『ああせざるを得なかつた』やうにしたのは、『空氣』であつたから、『空氣』とはまことに大きな絶對權を持つた妖怪である。一種の『超能力』かも知れない。なにしろ、專門家ぞろひの海軍の首腦に、『作戰として形をなさない』ことが『明白な事實』であることを强行させ、後になると、その最高責任者が、なぜそれを行つたかを一言も説明できない狀況に落し込んでしまふのだから、スプーンが曲るの比ではない。かうなると統計も資料も分析も、またそれに類する科學的手段も論理的論證も一切無駄であつて、さういふものを、いかに精緻に組立てておいても、いざといふときには、一切消し飛んで、すべてが『空氣』に決定されることになるかも知れぬ」と書き、戰後もこの狀況は變つてゐない、としてゐます。特に强いリーダーシップを嫌ひ、また責任の所在を不明確にしたままの意志決定がなされます。出る杭は打たれる。さういふ傾向が强いのです。

これは、言靈信仰の影響かも知れませんが、一見すると、理窟が通つてゐるやうな耳障りのよい、具體的な方法論のない、空理空論が現實的な正論を打倒してしまふ。例へば、人の生命は地球より重いといつて、テロリストを解放して、新たな犧牲者を出す。人の一人の生命が地球より重いわけがない。さういふ本當に空疎な言葉を竝べ立てる傾向が日本人にはある。

もう一つは、アメリカなんかからの壓力で、國外から思想とか制度とかを無批判に受容れる。

梅棹忠夫さんが、『文明の生態史觀』の中で、「日本人にも自尊心はあるけれども、その半面、或種の文化的劣等感がつねにつきまとつてゐる。文化水準の客觀的な評價とは無關係に、なんとなく國民全體の心理をを支配してゐる。一種の陽炎みたいなものだ。本當の文化はどこか他のとこ

ろで作られている。自分のところのはなんとなく劣つてゐる。これは、自分を中心にして、一つの文明を展開できた民族と、その一大文明の邊境諸民族の一つとしてスタートした民族との違ひであらう」と言つてをられます。

ですから、前島密が徳川慶喜に、『漢字御廢止之儀』といふのを出して以來、漢字廢止論がずつと唱へられて、近代化できなければ植民地化される、ローマ字にしなければ近代化ができないといふふうな思想が出て來ました。

これは、國を憂へる氣持から出てるとは思ふのですが、極めて思慮の淺い對應だといふふうに考へてをります。

しかし、それほどに非常にショックであつたといふことです。

戰後も米國式は優れてゐるとされまして、生活用式もどんどん變つて來まして、現在は、逆に日本スタイルのよさが見直されつつあるんですが、ときとして非可逆的なレベルまで變化させてしまふところが日本人の弱點になつてゐます。ある種の劣等意識が、外國から入つてくる思想とか經濟に對する考へ方ですね。それの、表面的な優越性に捉はれて、無批判に受容れる。

アメリカ發のグローバリズムもさうです。あれを受け入れて、日本の經濟ぼろぼろになつてしまつたのですが、さういふふうに無批判に受けるといふことが日本文化の弱點になつてゐる。

次に、かういふことをふまへて、防衛大學の中で勤務を通じて感じたことですが、現代青年の國語力、恐ろしいものがあります。ほとんど會話にもならない。防大ですらさうですから、他の大學はどうなつてゐるか推して知るべしだと思ひます。

二〇一〇年問題といふのを御存知だと思ひますが、平成二十二年一月六日の「學力考」といふ讀賣新聞の記事の中で、「二〇一〇年問題」といふことが企業の人事擔當者の間でささやかれてゐます。中學からゆとり教育を受けた世代が社會に進出する一方で、團塊世代の大量退職が續くことへの危機感を指してゐます。

すでに、大學では數年前からゆとり世代が入學してをり、OECD 加盟國による PISA（十五歳を對象とした國際學習到達度調査）で、二〇〇〇年には數學が一位、讀解力が八位。それが、二〇〇三年には數學六位、讀解力一〇位、ドーンと落ちてゐます。二〇〇六年、數學一〇位、讀解力一五位、また落ちてゐます。

今現實に、大學に入つた子に、中學レベルの教育とか、高校低學年レベルの教育をしないと、大學レベルの勉强に

入れないのです。その程度まで落ちてゐるわけです。何のために大學に來てゐるのかといふことで、現實に相當に低いです。今の防大では、入つてきた一年生に對して、高校では限られた科目を選擇してゐるために、もう一度、高校レベルの基礎を教へる補備教育が必要になつてゐます。文系の子は數學やつてゐません。自衞官といふのは理系がないと若い頃は役に立ちませんので、したがつて數學をやらせるのですが、數學について來させるための補備教育をしなければならないといふ狀況なのですが、防大自體忙しいので、もう少ししたら、どうなるのか分らない。もう少ししたらどうなるのかな、夏休みも與へないで勉强させないといかんのかなといふ非常に危機感を持つてをります。朝から就寢一〇時半までずつと動きつぱなしですから、補備教育をする餘裕はありません。今の所豫備時間を使つてやつてゐますが、將來が非常に心配です。

防大生に對して講義を行つたときに感じたのは、國語力が低いといふことです。かつ國語が出來る子と出來ない子の差が非常に激しい。どのへんのレベルに合はせればいいのかな、といふのが難しくなつてをります。

とくに、携帶のメール、あれの發達で、口語表現と文章表現の區別が全くできなくなつてゐます。論文をふつうの「話し言葉」のやうに「やつてられない」といふやうな言葉がでてきて、「書き言葉」と分けることができない。話し言葉がそのまま出るわけですから。さういふ傾向が非常に强くなつてゐます。

一番心配なのは、日本語本來の和語と漢語の融合したハイブリッド言語としての能力が劣化してきてゐるといふことです。隨つて、それは當然、思考にも影響を與へますし、明治維新で日本人が示したやうに、吸收能力も低下して行くのかな、と非常に心配してをります。まさにゆとり教育のなせるわざですし、それから、その携帶などの發達によつて、メールとか、さういふものの發達によつて、逆に、發達によつて、じっくり本をよむといふやうなことができなくなつてゐる。さう感じます。

具體的に、どういふしやべり方をするかといふと、主語がございません。おしやべりだらだら。接續語が不適切。語彙が不足してゐますので、ニュアンスの違ひが表現できない。

それから慣用句、格言、諺を知らない。

指揮官としての統率といふのは、「實るほどかうべを垂れる稻穗かな」の精神で行け、と行つたら、一人しか分らなかつた。愕然としました。それくらゐ、我々と若い世代

との言葉のギャップといふものはそれほど大きくなつてゐます。親が教へないといふのが一つの理由でせうが、教へられないのかも知れませんが、日本人の言語空間がせばまつてゐるのかな、と思ひます。しかしながら、さうはいつても、學生の能力を非常に向上させようと思つて頑張りました。

防大は凄いんですが、入つたときの入學試驗の成績が惡くても心配がないんです。入學のときの成績と、卒業のときの專門の、大學教育の成績の序列は相關關係が全くございません。

ビリで入つても、トップクラスで出て行つてしまふ。それくらゐ、私としては防衛大學の教育は非常に充實してゐる教育だなと思つてをります。

私自身は、統率といふ講義とゼミを行つてをりましたが、これを社會學的アプローチと、人間、宗教、心理學的アプローチの二軸で教へてゐたのですが、實際に學生に對して具體的な事例を示して、それから、具體的な概念を持たせるやうにしました。

その次にある程度、抽象的なことに入つた。より抽象化させるために、段階を追つた教育を行ひました。

そのために、學生に文庫本や新書等の購入しやすいものを「讀んで來なさい」と勸めました。興味を持つた學生は次の本を教へてください、といふやうに進めて行きました。

ゼミでは、日露戰爭の實相といふのを捉へてレクチャーしたのですが、各學生に、一人の指揮官について、生ひ立ちとか經歷とか、日露戰爭での活躍とか、日露戰爭後の人生まで、深く研究させまして、表面に現れない人間性や能力を理解させるやうにいたしました。人間とは優れた人間か否かで割切れないものであるといふことが學生にも理解できるやうになりましたし、論文作成に於ても、讀み手に理解させるやうに書きなさいといふことで、論文のストーリー性をいかに持たせるかといふことを教育してまゐりました。

その結果、その指導を通じて、學生達は歷史は人間が織成す綾だといふことで、學問の研鑽の爲に、國語力がいかに重要かといふことをだんだん認識してました。

隨つて、ゼミを終へて學生が、「日露戰爭の研究が面白い」とか、「日露戰爭のイメージが變りました」と目を輝かせて喜んでをります。

さういふのを見てをりますと、まだまだ、非常に危惧されますが、まだまだ可逆の所にあるのかなといふふうに思ひました。そのときに一種の感動を持たせるといふことが、

非常に重要だと感じました。

特に、乃木希典については、司馬さんの歴史觀とは私は眞反對で、素晴しい方だつたと思つてをります。本來、日露戰爭では、三分の一くらゐ死んだんですけども、本來なら陸軍で、三分の一死んだら、全滅です。乃木第三軍はのべ約十五萬人を投入し、死傷者六萬人で四割の被害でした。しかしながら、旅順要塞、四年かからなければ落せないといはれてゐたはずなのが、五箇月で落してしまつた。その後、鬼神の如く奉天に進撃しました。これはロシヤにとつて脅威です。

クロパトキンは、乃木の第三軍がやつて來るといふので、びびつてしまつて、戰ふ意欲をなくした。これが日露戰爭を勝利へ導いたと私は考へてをります。

さういふことを、學生に教へられて非常によかつたなと思つてをります。

もう一つ、凹文化の弱點と申しましたが、明治維新のときに、明治の人達がどうしてあれだけの活躍ができたか、と考へますと、戰略的思考ができたのは、明治維新があつたから、幕末があつたからと思ひます。そこで殺し合ひをしたから。凸文化のやり方を身に着けて、内面は凹文化の心を持てた、と思ひます。

番匠將補（當時一佐）が、人道復興支援部長として、イラクの支援に行つたときの話ですが、パートナーシップの發想で、いろいろな政策を取りました。

例へば、ＧＮＮブラダース（義理人情、浪花節で行かう）、またスーパーうぐひす嬢作戰といつて、裝甲車から手を振る。御近所プロジェクト、鯉幟とか。さういふことで、現地に融け込む。これは日本人しかできないことでしたね。さういふことで、凹文化の弱点を逆に長所にして行く必要があるのかと思つてゐます。まさにその、パートナーシップの發想といふのが、凹文化の特徴かと思つてゐます。

ですから、乃木大將や東鄕平八郎を育てるためには、歐米的な戰略發想を持つて、かつ内面的な日本人的な謙虚さを持つた人間を育てることが必要だと思ひます。

もう一つ大きな問題でございますが、軍國主義だつたとして、戰後、軍事が否定されましたので、大學等で、安全保障に對する學問のレベルが非常に低い。情報が不足してゐる。

ですから、我々も、英語喋れないとついて行けない。かつ、全部略語なんです。

それが非常に苦しいですね。

NCW（ネットワーク・セントリック・ウォーフェア）といふ言葉があるんですが、こんなのも、NCWといふ。日本語に譯せない。敢て譯すと、「情報化時代に對應する新興の軍事活動」、あるいは、「指揮統制通信情報網を中核とした戰ひ」、と言ふやうにしか表現できない。かういふものを取入れて行く能力が、自衞官に非常に要求されてゐる。

そのためには、私は、日本語で概念力を非常に高めることによつて、さういふ外國語の新しい概念にキャッチアップできるのかな、と思ひますので、外國語は必要ですけれども、まづは、日本語での概念空間を擴大する必要があると思ひます。ですから、我々は人に對する投資は、全員には投資しません。優秀な者に集中的に投資します。

さういふ外國語の新しい概念を我々に優しく普遍させるやうな人材を育てるといふふうに、つまり、勉強する人材には徹底的に勉強させる、といふのが我々のやり方でございます。

ちよつと最後、駈足になつて參りましたが、だらだらとくだらぬことを言つて參りまして、申し譯ございません。いづれにしても、私としては、外國人の日本人評を四つばかり擧げましたが、これを後で見て戴いて、日本人がいかに素晴しいかといふことを若い世代に傳へて行く必要があるといふふうに思ひます。最近元氣のない世の中ですから、日本社會が無感情化してゐますが、これも言語力の不足からといふふうに思つてをります。

以上でちよつとまとまりなくなり、ちよつと時間をオーバーして申し譯ございません。ありがたうございます。

（もとむら　ひさお　元航空自衞隊幹部學校教育部長）

競技かるたの歴史と美しい讀みについて

稻葉修至

司會（谷田貝常夫）

全日本かるた協會のはうから多くの方がおいでくださいました。私どもの講演會はとかく地味なもので、たまにはこのやうに、若い女の人も參加する華やかな會が開けたらと、今日はたいへん嬉しく思つてゐます。

實演から始めていただきますので、最初に、東京都かるた協會會長の橫矢美惠子さんに解說していただきながら進めて行きたいと思ひます。

一、模範試合

橫矢美惠子（全日本かるた協會A級公認審判員　A級公認讀手）

皆さまこんにちは。本日は、百人一首の世界を皆樣に紹介させていただく機會をいただきまして、ほんたうにありがたうございます。講演に先立ちまして、ただいまから、取りカルタを、實際にどのやうにして取るのかをみなさんに御覽いただきたいと思ひます。

本日の對戰者、みなさまのはうから向かつて右側が中村香織、A級四段、杉竝かるた會所屬です。左側にゐますのがイーブン美奈子。クルンテープかるた會、タイから、たまたま來日してをりまして、參加していただくことにしました。B級二段です。讀手（よみて）は專任讀手（どくしゅ）、稻葉修至。講師でもあります。よろしく御願ひ致します。

取り方を簡單に御說明いたしますが、本來それぞれ、持ち札は二十五枚づつですけれども、今日は時間の關係で各十五枚づつにしてをりまして、竝べてから十五分暗記を致します。今はすでに暗記はしております。

それでは始めます。最初に一首、空札（からふだ）といふ札を、そのあと空札の下の句を讀むところからが競技です。

＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊

最後はどうなつたかお分かりでせうか。

最後、相手、美奈子さんの所に「いにしへ」がありまして、「あまつかぜ」と二枚持つてゐましたけれども、中村選手、「いにしへ」を攻めて行つて、お手つきしてしまつたのです。「吹くからに」は、美奈子さんに取られましたので、一氣に二枚、逆轉のイーブンさんの勝利といふことです。先に

自分の陣地がゼロになつた方が勝といふことで、今の勝負は二枚でイーブンさんの勝といふことです。良い勝負だつたと思ひます。

司會

どうもありがたうございました。相撲は世界で一番狹い場所、空間での競技だと思つてゐましたが、それより疊三枚の上で勝負するといふ、大變驚きました。もつと雅びなものと思つてをりましたが、本當に眞劍な勝負でした。

ここで、今回の實演と講演を紹介してくださつた、前の本會理事、盤谷在住の大口道雄さんに一言、御挨拶をしていただきます。

大口道雄

今、歷史的假名遣と關りを持つて暮してゐる人達に二種類あります。一つは、俳句を作つてゐる人たち。俳句は今でも歷史的假名遣が主流です。もう一つが百人一首のかるた取りです。私は今、タイで暮してをりまして、四年前に創設された地元かるた會の副會長をしてをりますが、かるたをタイ人の青少年に傳へようと、仲間と一緒に頑張つてゐます。タイの子供達が、あのかるたを、平安時代そのままの歷史的假名遣で學んでゐることを是非、認識して戴きたい。バンコクのかるた會を創設した日本人女性は、いま北京にかるた會を作つて普及活動を始めてゐます。まもなく韓國のソウルにも進出するやうです。このやうに、日本の傳統文化をアジアへ廣めて行きたいと、我々は頑張つてゐます。どうぞ、皆樣の御聲援をお願ひ申上げます。

司會

いづれにしましても、あと二月も經たない、ひと月ちよつとで御正月が參ります。そのときのかるた競技で、多くの方がこれから伺ふ美しい讀み方に近づけられればと願つてゐます。

二、競技かるたの歷史

稻葉修至

社團法人全日本かるた協會の專任讀手、稻葉でございます。よろしくお願ひします。

今實際にちよつと枚數を減らしたところからですけれども、競技としてのかるたを御覽いただきました。最近、「疊の上の格鬪技」といふ云ひ方で紹介されることも多くなつてをります。皆さま御覽になりましたイメージはさういふ感じだつたでせうか？

この「疊の上の格鬪技」なる表現は多分、今日お見えになつ

てゐます渡邊永世クイーン（渡邊永世クイーンのご紹介～拍手）、彼女が、「人間ドキュメント」でしたかね、ＮＨＫの取材を受けまして放映されました。その副題でつけたのが最初ではないかと思はれますけれども、確かに見ると「格闘技だな」といふ感じを與へます。

ただ「疊の上でやる格闘技といふのは柔道だ！」といふことを申す方もをりまして、いはれてみればなるほど競技かるたの表現としてこの言葉が適切であるかどうかといふ所はちよつとクエスチョンがつくかも知れません。

競技かるたといふのは、百人一首なんですけれども、百人一首は學校教育で「古典」の入口として使はれてゐたりして、全く知らないといふ方はあまりいらつしやらないのですけれども、競技の方になるとどこまで皆さんがご存知なのかと疑問に思ふところです。最近では、正月の名人戦・クイーン戦といふのがありまして、まあ、謂はば日本の競技かるたをやつてゐる方達の最高峰です。それがテレビのニュースなどで、ＢＳでは生中継とかもあるんですが、流れることもありまして、まつたく知らないといふ方はなくなつてきているやうに思ひます。

ただ、實際にその場で見たことがある方といふのは、もしかしたらそれほど多くはないのかも知れません。今日は皆さんは、さういふ意味で初めて御覽になつた方が多かつたかと思ひます。迫力を感じ取つていただけたら幸ひです。

今日、御題を戴いてをりまして、競技かるたの歴史といふ觀點と美しい讀み方といふことで、ふたつ折込んでしまひました。これをずらずらとやつて行きますと、何時間かけても足りない部分がありますので、ちよつとはしよつた形で、御紹介をして行きたいと思ひます。

競技かるたはこのところ漫畫になりまして、「ちはやふる」といふ題で講談社の女の子向けの漫畫雜誌に載つてゐます。それでかるたを始めたいといふ若い人が殖えてゐます。

さういふ「かるた」ですけれども、素材は小倉百人一首を取つてをります。一二三五年に、小倉百人一首を藤原定家が撰したとされてをりますが、定家が撰したといふところはほぼ間違ひないらしいのですけれども、撰ぶに當つては昔からいろいろと云はれてをります。百人の歌人の歌を一首ずつ取り上げてゐますが必ずしも秀歌と云はれるやうな良い歌を選んでゐるわけではないといふことで、定家はどういふ意識でこの歌を撰んだのであらうかといふ問題もあつたりします。

ただ、今日は、國語問題協議會といふことで、協議會のみなさんは藤原定家を「百人一首の撰者」といふよりも「定家假名遣」といふ方で意識をされてゐるのかなと思ひます。

「かなづかひといふものを初めて意識的に實踐した」といふことですが、まあ、實際には、下官集に書かれてゐるのは、六十語をちよつと超えたくらゐの語數ですから、それに對しての讀み方を自分で決めただけといふことなので、今日みなさんの認識してをられる假名遣とまつたく同じかどうかはちよつと別としてですね、ただ、さういふ意識を最初に持つた人なんですね。

その定家が撰んだ小倉百人一首を素材として使つて、上の句を讀んで下の句を取るやうな、かういふ「かるた」といふ形に、どういふ風に結びついていつたのかといふことは、一應よく云はれてゐる所をレジュメには入れておきました。

貝覆ひといふ遊びがありました。蛤の貝殻を二つに分けて、同じものでないとピタッと合はないといふところを用ゐて、貝と貝を合せる遊びなんですね。さらに、裏に繪を書いて、なんていふことにもなるわけですけれども、さういふ對になる貝殻を合はせる遊びと、あとはポルトガルから入りましたいはゆるカルタ。「うんすんカルタ」とかいふ云ひ方で、御存知の方もいらつしやるかも知れません。このかるたといふのは、四つのスーツに十二枚づつ、四十八枚といふことですから、花札に近いと思つて戴ければ良いと思ひます。それと、讀札・取札にあたる上の句札・下の句札みたいなのとがどう繋がつて行くのかといふところは實はよく分かつてゐないのです。

小倉百人一首の研究者でもいらつしやいす吉海直人さんの本なんか見てをりましても、貝覆ひといふのと小倉百人一首が結びついて歌がるたが出來たのではないかと云はれてゐる定說と思はれることについても「異論がないわけでもない」と書かれています。本當に「よく分かつてゐない」のです。

では、實際に「競技」といふ形になつて行くのはどういふ歷史があつたのかといふ所になります。もともと江戸時代には、少なくとも歌を讀んで札を取るやうな遊びがあつたやうですが、それを私としては「御座敷かるた」と呼ばせていただきたいと思ひます。それが「競技」として、すなはちルールを決めて行ふやうになつたのは、いつくらゐからなのでせうか。

かるたをやつてゐるシーンで一番有名なものとして尾崎紅葉の金色夜叉の一幕が云はれます。かるたといふと必ずこれが出て來るんですけれども、前後を讀むとどうも競技というよりも遊びとしてのちらし取りの方法で「御座敷かるた」をしてゐたらしい。

このときのかるた札はと云へば、本には書いてありませんけども、當然のことながら、變體假名で、ちらし書きをしたやうなかるた札であつたはずです。印刷されたやうなものではないですね。なぜかといふと尾崎紅葉、明治三十年から三十五年くらゐに、この金色夜叉を連載してゐますが、實際に標準かるたといふやうな、いはゆる假名を使つたかるた札、印刷文字のかるた札、變體假名がなくなつた今でいふところの假名、このかるた札ができたのは、もつと後のことであるわけです。

では、標準かるたは誰が作つたのか、競技のルールは誰が決めたのかといふことになりますが、それが黒岩涙香。黒岩涙香といふのは、明治時代の智識人、飜譯家、あるいはジャーナリストともいへる方です。飜譯といふより飜案なんて云ひ方のはうが正しいかも知れません。アレクサンドル・デュマのモンテクリスト伯を「岩窟王」といふ名で日本に紹介したのはこの方です。この黒岩涙香さん、ジャーナリストといふだけではなくて、萬朝報といふ新聞、これの社主でもありました。新聞といふメディアを使ひながら、競技の方法を統一したい、するんだとの思ひで、競技としてのかるたのいろいろを自分で決めるわけですね。今デモで御覽になつたもののルールとほぼ近い、三段に竝べますとか、横は何センチくらゐだとかいふのは、この黒岩涙香が定めたわけです。で、明治三十七年（1904）に、東京かるた會を作つて、競技會を開いてゐます。

全日本かるた協會は、この年が、かるた競技のスタートだとしてゐまして、先般、二〇〇四年にはちやうど百周年を迎へました。百年史なんてかるた史も一應まとめたわけです。

それでも今日のレジュメをそれの抜萃にしなかつたのは、國語問題協議會の皆樣方にお見せするに當つては、やはり正字正假名でお出ししたいといふ私の意識がありまして、協會で出しているものに勝手に手を加へてお出しするといふのはちよつとハードルが高かつたといふことで、全日本かるた協會員で百年史の作成のメンバーでもありました瀧澤君が個人的にまとめた「かるたの歴史」をお借りし

て、少し手を入れた形で出すことの諒承を得ました。（半分脅かして借りたやうなものなんですけども）レジュメの競技かるたの歴史と書かれたあたりは、彼の原稿ほとんどそのままです。

話を戻します。黒岩涙香が、あるいは東京かるた會が、「標準かるた」といふものを作りました。それ以前は草書で書かれた文藝的かるた、さつきちよつと云ひました、ちらし書きをしたやうなものでありました。さういふかるたを使つて取ると、札によつてみんな見た目が違ふわけです。それでは慣れてゐる人が取れるといふことになるわけで、公平性を缺くといふことから、標準かるたといふ同じ活字で書かれたかるた札にしました。これが現在我々が使つてゐるものにそのまま繋がつて來るやうなものかと思ひます。若干、改訂はあるんですけれども、基本はさういふことになります。

では、そのまま、明治三十七年くらゐの所から、ずつと競技かるたといふのは肅々と續いて來たのかといふと、その間に實はいろいろな問題もありました。まづは、標準かるたを使つてかるた競技してゐるんですけれども、ちやうど明治三十七八年あたりといふのは日露戰爭前後、正確にいふと、先程お話した第一回のかるた會の開催は三十七年の二月十一日なんですが、開戰は二月十日、前日だつたといふことですから、「競技かるた」が始まつたのは日露戰爭とほとんど同じであると思つてください。

レジュメには、「敵味方に分かれて爭ふ遊びである點でかるたが受け入れられたのであらう」と書いてありますが、これは額面どほりには受け取れません。實はもう少し時代が後になりますと、全然違ふ評價が出てまゐります。

たしかに、日露戰爭時代には「かるた」が廣まつては行きました。かるたの大會の結果などが新聞に出るやうな時代、「王座を目指し奮迅の熱戰」なんていふ形で記事が載つたりした時代だつたわけです。それが大東亞戰爭においては、昭和でいふ十七年當りですが、この戰爭が始まつたらどういふことになつたかといふと、「國家非常時、國民總動員の今日、戀の歌をもてあそぶとは何事ぞ」といふやうなことになりまして、小倉百人一首での競技ができない時代になりました。

そのときには、ちよこつとそこに出てをります愛國百人一首などといふ、違ふ歌、勇ましい歌だけを集めた百人一首を使つて、大會を開いたりした、涙ぐましい時期もあつたやうです。昭和のこの時代は、競技かるた受難の時代と

いはれるやうな時期だつたかと思ひます。

戰後にまた復活をさせて行くわけなんですけれども、ここで、昭和二十五年くらゐから、名人戰——かるた競技での日本一を決める大會をやりませうといふやうな話が出て來るわけです。そこでちよつとした問題があつて、實は、昭和二十一年に、例の、現代假名遣なんてものが世の中に出て參りまして、その少しあとのことです。これは小學校令の發布とも絡むわけなんですが、現代假名遣で書かれた「新制かるた」といふかるた札が出來まして、それを使ふべきだといふ人と、いやいや、もともとの「標準かるた」（「公定かるた」と云ふ名前に途中で變りましたが）歷史的假名遣の札を使ふべきだといふ人と、意見が分かれて行くわけです。

そこで、實は、東西で決定された代表による名人の決定戰をやらうと云つてゐる所で、東日本の聯盟の方は「新制かるた」といふ札を使ふことを主張して、西日本側の方は從來のそれで行きたいといふことがあつて、これで、最終的には、かるた協會と云ひますか、この團體の分裂、かるた會そのものが二つに分かれる所に繫がるわけです。かるた會の分裂といふことでは、レジュメでは、四ページくらゐの所にも少し書かせて戴きました。

「世論は歷史的かるたを支持する者が大半であつた」といふところがあります。結局、二種類のかるた札があつたんですけれども、現在のかるた札を見ていただくとお解りのやうに、歷史的假名遣を使つた札が生き殘つてをります。それはなぜかといつたら、やはり古典であります小倉百人一首を題材にしたものでありますから、當然のことながら歷史的假名遣を使ふべきであらうとのことでせう。それが廣く國民の皆さんにも受け入れられたといふふうに理解をしてをります。

さういふ形で始まりました名人戰なんですけども、これがまた昭和三十年ですか、新しく、全日本かるた協會といふ統一の團體が出來た後に改めて第一回のかるた會を開きました。まあ、實はさきほど申し上げた分裂といふのは、その後もないわけではなくて、全日本かるた協會とは別に、「日本かるた院」といふのを作られた方もいらつしやるわけですが、そこのあたりは、時間の關係であまり御說明はできません。瀧澤聰さんの書いた歷史、非常に面白い文章であり、非常に良い文章だと私は思つてをりますので、これを皆さんに御持ち歸り戴いて讀んでいただきたいと思ひ

ます。

競技かるたを、そのときどきで誰かしらはやつてゐて、自分たちでやつてゐる場を少しづつ廣げようと熱心に努力してゐるわけです。してゐるのですが、一方で、日本の國語に對する政策の話が一方で出て來て、それに振り回されてゐた部分があるのではないかと思はれます。さういふあたりが、うまく說明ができたかどうか解りませんが、競技かるたの歷史といふところについてご紹介しました。

三、美しい讀み

もう一つの演題は美しい讀みです。競技かるたの讀み、先ほどこちらで實演したときに私が讀みましたように、一應讀み方が決まつてゐます。

四・三・一・五方式といふのですが、下の句を四秒台で讀みます。

いまをはるべとさくやこのはな

最後の「はなー」と伸ばすところ、この伸ばす所を餘韻と云ひますが、これを三秒伸ばします。で、一秒間を空けて、次の上の句を五秒台で讀むといふやうにタイミングについては決められてをりまして、講習會なども開いてゐるわけです。これは何を目的としてゐるのかといふことですけれども、要するに、競技かるたといふのは、音を聞いて、それに反應して取るわけです。といふことは、讀み手が違つたときに、違ふ讀み、いつも練習してゐるのと違ふといふところで、取りにくいとかさういふことがあつてはいけない。極力讀みについては統一したいといふことが當然出てくるわけです。

ここで統一するのがタイミングについてだけでしたら秒數とかで御話できるところがあるんですが、タイミングではなくて、どういふ音で讀んだら良いのか、どういふ發音で讀んだら良いのかといふところは非常に難しいです。

なぜ難しいかといふと、基準がないからです。古典ですから、そこに書かれているのは讀み札であらうとも歷史的假名遣で書いてあります。歷史的假名遣でかう書かれたやつは、かういふ音になつたとかいふ人がゐるんですけども、本當にその音になつたのかならないのかといふ所では、今日もう一度みなさんに考へて戴きたいと思ふところがございます。

後で二～三首例に出しまして、我々が讀むに當つてどう

いふことを考へたりしてゐるのかについて、もう少し御話を續けたいと思ひますけれども、最近よく、聲に出して讀みたいなんとかみたいなものが出ていますが、ああいふ本を見ると、すごく良い文章が竝んでゐるわけです。美文といふ云ひ方で良いでせうか。確かにさういふのは美しいと思ひます。思ひますけれども、ああいふ本はどう讀んだら良いかつてあまりちやんと教へてくれません。かういふ本はきれいだよ美しいよつて云つてはくれるんだけども、どういふ發音でどう讀んだら良いのかといふことは教へてくれません。

その後ですね、音源がついたシリーズなんかも出てきてゐますが、こちらは標準的な讀み方なんてことは全然考へない。どちらかといふと方言を殘したいとか、地域性を生かした形で讀まれたものを美しいと紹介してゐるわけです。

私の欲しいのはそれではなくて、今、歴史的假名遣で書かれてゐる競技かるたの讀み札をどう讀むべきか、どう讀んだら綺麗なのか、どういふ讀み方を周りの人に勸めて讀みとしての統一感を取ろうかといふあたりなのですが、非常に難しい所であります。

今、實は日本語の發音といふのはすごく平べつたくなつてゐるやうに感じます。なぜかといふと、これは「現代假名遣い」の弊害だと私は思つてをりますが、表音的だといふ認識の裏返しがどうなるかといふことが實際に出てゐるのだと思ひます。假名文字で書かれてゐたら、その文字を見てそこから發音をさぐるといふことを今の人はしてゐます。

例へば、つい何代か前の、最近ころころ代るから、何代か前といふことになつてしまひますが、日本の首相ですが、「みぞうゆう」とか何とか云つたことがありますけれども、あれは確かに間違ひかも知れませんが、ではどう讀むのかといふときに、假名で「み・ぞ・う」と書いてあるわけですね。この「み・ぞ・う」と書いてあるのは、どう讀むのが正しいか。ここにゐる皆さんの中でも多分二つか三つかに分かれるのではないかと思ふくらゐです。どれが正しいか自分でもはつきり御説明できないところがあります。

なぜかといふと、やはりその、發音、音は、まづ語が先に來る、ワードが先に來るわけであつて、さういふ發音である「言葉」といふものが先にあるわけです。あつたものを假名で書いたのが「み・ぞ・う」といふことにはなるかも知れないけれども、そこから元々の音を測るわけには行かないわけです。

さうしたらどなたかが、この言葉はかうなんだよ。言葉としてはかうなんですといふ部分を、やはり出していただかなきやいけない。さういふ「標準」といふところを長いこと擔つてゐたのは、標準語だの共通語だのとやつてゐたNHKさんであつて、ちよつとおんぶにだつこみたいな所もあつたのかも知れません。日本語の發音は變はつて來てゐますけれども、昔のやうなゆるやかに擴がるといふ變はり方ではないのです。今では、テレビとかで音が流れてきます。流れてきますと、それをそのまま正しいかのやうに聞いてしまうのでせう。いろいろとさういふ所で問題があります。

テレビとかで使ふ言葉がさうであつたり、教育する人が發音について、もうちよつとやつてくれれば、こんな狀態はなかつたと思ひますけれども、今は他の人がしやべつてゐる話を聞いて良く解らないことがある。それは、先ほど申し上げた發音が平べつたいからではないかと思ふのですが、ひどいことにテレビのバラエティ番組なんか、話してゐる内容が畫面に表示されてゐる。要するに、聞きながらあれを見てやつと解るといふことでせう。あれは決して、聽覺障碍の方のために出してゐるわけではないと思ひます。聽覺障碍の方のために出してゐるのだつたら、ドラマであれ、何であれ、出しますよね。さういふことでやつてゐるわけぢやない。バラエティ番組に出てゐる人たちのワーッとしやべるのが解らないのでせう。聞きづらい、といふことからやつてゐるのだと思ひます。

少々脫線しましたので元に戻しまして、三首ほどの讀み方をご紹介します。

百人一首は、百首に一應順番がついておりまして、「秋の田の」から始まつて、「百敷や」で終はるほぼ時代順の竝びです。この一番先頭に、「秋の田の」といふ歌ひ出しの天智天皇の歌があります。

この歌、何が難しいかと云へば、「秋の田の」といふ初句に續く二句目が難しいんです。

實はこれ、私、さつき讀んだんですね。讀んだ中に入ってをりました。

「あきのたのかりおのいおの」と讀んでゐます。これ、しやうがなく讀みました。本當は何であつたかといつたら、昔にさかのぼれば、「かりほ」つて、これ何かといふと、刈つた穗、「稻穗を刈りました」の「刈つた穗」と、「假りの庵」、「かりいほ」を掛けた言葉なわけです。

「假りの庵」と「苅つた穗」をかけて「かりほ」といふ

言葉なんですけれど、ここで何が問題になつたかといへば、「いほり」が「いほり」ぢやなくなつてしまつた、「いほり」が「いおり」になつてしまひました。刈つた稻穗の方はたぶん今でも「かりほ」と讀むのでせう。といふことで、この掛詞が、実は、成り立たなくなつてしまつたんですね。

この掛詞の部分をなんと讀んだら良いか。「かりほ」か「かりお」か。

さらには掛詞の後にもう一回「いほり」が出て來るのですが、これは重ね言葉といふ形で、「かりほ」とその後ろにまた「いほ」といふのが出てきて、それが「かりほのいほ」と續けて出て來てゐるのが、重ねてゐるのが面白かつたんです、この歌は。それでやむをえず、刈つた稻穗の方にちよつと我慢してもらひまして、我々が表現者として讀むときには、その重ね言葉の面白みの方を表に出さうかといふことになつたので、「かりおのいおの」と讀むんです。まあ、ちよつとさういふ、言葉が、發音が變はつて來てしまつたことによつて、もともとの掛詞が意味をなさなくなつたといふ難しい歌でした。

ではもう一つ、三十九番目の歌。「淺茅生の」といふ歌です、これも實はさつき讀んだのですけども。

この初句の淺茅生、茅がまばらに生えてゐるところですが、今、現代語で何といふかといへば、「アサジュー」といふんでせうね。拗長音でいふと思ひます。アサジュー、氣持惡いですね。私はそれがいやで。讀手やつてる皆さんにはどういふふうに教へてゐるかといへば、少なくとも「アサジウ」と讀むやうにと。「ジュー」ぢやない。私はもう少し別のことも考へてゐて、これは「アサジフ」でも良いのではないかと。で、「あさじふのをののしのはらしのぶれど」。「あさじふの」。

微妙でせう、ちよつと、ジューでもない。でも、ウでもない。ウよりも少し弱い。それは、もしかしたらフかも知れないがまつたくのフではない。かういふ所を、どう讀むのか考へるのは難しくて、どこにも規範になるものがありません。ないから自分で作るんですけれども、それが美しいといふキーワードで、私が美しいと思ふ讀み方を實踐して行くしかない。

ただ、據り所は欲しいです。何か、據り所が欲しい。據り所があつて、それと、自分の意識がぴたつと合つたものであれば、いろんな人に、かうだ、ともつと自信を持つて廣げられるやうな氣がします。

八十三番目に、「世の中よ」といふ歌があります。定家のおやぢさん、俊成の歌です。これは何が問題なの

かと云ふと三句目ですね。「おもひいる」と書いてある、ここをどう讀むかですが、現代假名遣で書いたら、「おもいいる」ですね。「オモイーイル」つて讀んだら、すごく汚い感じがしませんか。私はこんな讀み方は耐へられない。それで、「オモヒーイル」と讀むわけです。「おもひ」の「ひ」と「いる」の「い」は音が違ふんです。

「ハ行轉呼」で、「ひ」は「い」になりましたと云つてゐます。だから、「オモイ」になるし、もともと「入る」は「イル」だつたといふ所で、現代假名にすると同じになります。今の若い人は、さつき云つたやうに、この假名から音を拾ふので「オモイーイル」と平氣で讀みます。讀むんだけど、それは、さうしないはうが良いよ、といふことをやはり私は云ひたい。

この續きは、私、ここで申上げるのは非常に恥かしいのですが、福田恆存先生が『私の國語教室』の中で、「『買ひ物』の『ひ』は『命（いのち）』の『い』よりも『左（ひだり）』の『ひ』に近いのではないか。それが私の最初に抱いた疑問である」と書かれてゐます。まさしく、これは私がさきほど申上げたのと同じです。

ここで云つてゐる「ハ行轉呼」の「ひ」を、ぢやあどう讀んだら良いのか。「わいうえお」の「い」になつたつて、あんまり思はないはうが良いんですね。福田先生も「わいうえお」ぢやないつておつしやつてゐる。

なんと讀むかといふと、もうちよつとだけ、これで最後ですからね。

アワヤ喉サタラナ舌にカ牙サ齒音ハマのふたつは脣の輕重。「五音の歌」といひまして、二代目市川團十郎の一七一八年初演の歌舞伎演目の一部である「外郎賣（ういろう）」の口上の中にもでてきます。この「アワヤ喉」。

本居宣長の字音假字用格の冒頭に「あ行」と「わ行」と「や行」についての、その三行の違ひについて語つた喉音三行辨があります。「あ」と「わ」と「や」は喉で出す音だと云つてゐるわけです。この「わ」はハ行轉呼によつて「わ行」になつたものではないか、ハ行轉呼の「ひ」はこの音ではないか。つまり、喉で出す音ではないかと私は思つてゐるわけです。だから、オモヒーイルと云つてゐるのは、「い」ではない。口を開いた「い」ではない。もつと、喉の奥の方で出してます。でもはつきり「ひ」でもない、「オモヒ」とはつきり云つてゐるわけでもない。

オモヒー。みなさん、これは實際に聲に出して御覽になると解ると思ふんですけれど、多分普通に發音していらつしやいます。ゐるんですけれど、「いる」の「い」とは違

ふといふことは餘り認識されてゐない。

音韻といふ意味で、ハ行轉呼によつて「ひ」は「い」になりました。しかしながら音聲といふ意味では「いる」の「い」とは違ふ音だといふことが私が申し上げたかつた所であります。ですから、ハ行轉呼で「わ行」になりましたと云はれてゐる、その「わ行」といふのは、現代語の「わ行」と同じになつたのではないといふことをちよつと申上げました。さういふことを色々考へて、讀み手としてはやつてゐるわけです。

では、さういふ歌を讀むときに、どういふ讀み札で讀んだら良いかといふ話があるのですけれども、特に今日は、ハ行轉呼の話をしました。

これがはつきり解るやうにするには現代假名遣でかかれた札では絶對駄目なんです。歴史的假名遣で書かれた札で見ると、明らかに語中語尾の所で、「はひふへほ」も出て來てゐます。それは、たとへば「ひ」と出て來たら、これは、今では、「い」といはれてゐるかも知れないけれども、「い」に近い喉で出す音かなといふことを考へて戴けたらなあと思つてゐます。

どちらかといふと國語問題協議會の皆さんは、發音といふことよりも正書法といふ所での認識の方が強いのではないかなと思ひましたので、もしかしたら、そんなことは解つてゐるといふ御話だつたかも知れませんけれども、表現者として日頃考へてゐるところを少し御話させて戴きました。

どうもありがたうございました。

（いなば　しうじ・社團法人　全日本かるた協會　專任讀手　七段）

第八十七回國語講演會平成二十二年十一月十三日於日本倶樂部

國語と外國語について
——半田一郎先生から學んだこと

佐藤　優

ただいま御紹介に與りました、前科一犯の佐藤優です。（笑）今日のタイトルにあるやうになぜ半田一郎先生について話すかといふと、実はこの國語問題協議會について、始めてきちんと教へて下さつたのが、半田一郎先生なんです。

何故レジュメを作らないのか

今日は、全部で五つの大きな枠の話をしたいと思つてゐますが、私はレジュメとかパワーポイントとかを作つて來てゐません。これは、手抜きをしてるつもりではなく理由があります。今日、ここに岡崎久彦元サウジアラビア大使、元タイ大使が來てをられますが、この岡崎大使は、外務省の中で一番最初に近代的なインテリジェンス情報組織である、情報調査局（後に國際情報局を經て、現在は國際情報總括官組織）を立ち上げられた方です。岡崎大使の流れのとほりに行つていたら、今頃、日本版ＣＩＡが出來てゐたはずです。私は岡崎大使の薫陶を受けながら育つたといへるのですが、岡崎大使の話はいつもレジュメやパワーポイントはないんです。なぜか。これはやはり情報のプロだからです。情報の專門家たちと意見交換したときに、パワーポイントやレジュが出て來るのはアメリカのＣＩＡだけです。イギリスの情報機關といふと皆さんは、００７のＭ１６を思ひ浮かべますが、實はＭ１６といふ組織はありません。本當はSecret Intelligence Service（ＳＩＳ、外務省祕密情報部）であつて、陸軍情報部第六局といふのはダミーなのです。存在しない組織の名前を使つて、情報を集めようとしてゐるのです。

ロシヤの對外情報廳もさうで、このロシヤの對外情報廳にずつとゐたのが、今のあの死神みたいなプーチンさんです。私も通譯を何回かしたことがありますが、プーチンは、すーっと血の氣が引くやうな怖さがあります。それからイスラエルのモサドの人たち。かういふ人たちと仕事でつきあつてゐたのですが、かういふ人たちはレジュメをくれません。ときどき、大變難しい固有名詞とか數字が出て來ると、パッと紙を一枚見せてくれて、メモさせて、また戻し

てしまふのです。

なぜかといふと、そのはうが記憶の定着がいいのです。痕跡がつかないやうにやるといふ諜報機關の連中の習性とともに、記憶をよくするためには、一切、パワーポイントやレジュメを使はないはうがいいといふのが、どうも情報の世界の掟のやうなものです。

確かにパワーポイントを使つてきれいな本にしたりビデオを見たりすると、そのまま解つたつもりになります。ああ、面白かつたなあと友達と一杯飲んで歸ると、特に、ハイボールとか炭酸の入つたのがよくないのですが、だいたい翌日八割くらいが記憶から消えてしまふのです。それで今日はレジュメなしの、出來るだけ立體的な話をしたいと思ひます。

一、國体論と國體の根本

私は、日本語論とか日本論が嫌ひです。それは、外側にゐて日本を見てゐるといふ視座からの論だからです。あくまでもこれは國語であり、國史であつて、日本語や日本史ぢやない。ところが、國體といふことで廣辭苑を引きますと、何と出てゐると思ひますか。「國民體育大會」と出てゐるのです。(笑)これはなかなか大變な話です。それで、私は、國體の本義を蘇らせなきやいけないと思つて、文部省が戰前に作つた、「國體の本義」を、產經新聞の「正論」に連載してゐる。國體の本義を讀み解くといふ形にして。

國體といふのはどの國にもあります。萬邦無比の我が國體といふのは、我が國の國體。別の言ひ方をするのなら、目に見えないもの、これを國體と言つてもいい。この感覺が解るのは、私の今までの經驗ですと、イギリス人とイスラエル人であります。なぜならば、この二つの國には成文憲法がないからです。成分憲法がなくても、何を以てイギリス人とするか、何をもつてイスラエル人とするかといふことを、あの人たちは解つてゐるのです。ですから、私は保守派の人、あるいは、日本では、不思議なんですね。みんな右翼とは言はないんですね。私は右派だが右翼ぢやないと云ふ。どうして右翼はいけないんですか、と訊くと、右翼というと街宣車に乘つてゐる感じがする。(笑)さうすると、もう一回訊きます。街宣車に乘つてゐて、なぜ惡いんですか。さうすると、だいたいそこで、議論が終つてしまふんです。

私はどの社會にも右翼と左翼はゐると思ひます。右翼と左翼といふ言葉が近代的に使はれるやうになつたのは、一七八九年のフランス革命以降のことです。今、私は議長

席に坐つてゐます。一番左の奥は岡崎大使ですから、岡崎大使は最左翼といふことになります。（笑）その左翼のポイントは何かと言ふと、理性であります。理性といふのはすべての人が持つてゐる。そして、その理性に基づいて、完全情報があれば、一つの結論が出る。裏返していふならば、理性にもとづいて、理想的に國家や社會を構築することができる、かう考へるのが左翼思想であります。

さうしますとですね、トップクラスの官僚は違ひますよ、中堅くらいの官僚で、そこあたりの所から、官僚なんかになつて出世するには時間がきて、俺はもうこぼれちやつたなと思ふと民主黨あたりに行つて、國會議員にならうとするやうな中堅くらいの官僚であるとか、ちまちましたことをやつてゐる中堅の官僚といふのは、みんな左翼的な發想なんです。何か決裁書で書くと、教へたとほりにやれ。さうすれば、理想的なことが實現する。さう思うんです。さうして、政治を馬鹿にするんです。

ところが、トップクラスの官僚になると、逆に人事の限界、構築主義的なことの限界が解つてゐるんです。ものすごく、構築主義的に考へて物事を組立てます。しかし、そこだけぢや、解決できることはない。

今申し上げた右翼といふのは、左翼が登場して來た頃、人間と理性とかいろいろ言ふけれども、理性よりも、偏見といふものを人間は超えられないんぢやないか。その人が生まれ育つた環境、教育、それから、いろいろな偶然の出會ひ、それによつて偏見があるから、虚心坦懐に理性的に話をしたつもりでも、いくつか違つた答が出て來てしまふ。さうなると、それをお互ひに認めて、多元的な世界を承認してゐる。これが人のあり方として正しいのではないか。それとともに、理性の枠では割り切れないものが、王様であるとか、貴族であるとか、あるいは教會であるとか、といふものがある。これが今、存續してゐるのはそれなりの意味があるのだから、それを承認して行かう。あるいは、神話に關しても、神話は科學によつて否定するものではなくて、神話は解釋して行くものなのだ。かういふ考へになつてゐるわけです。ですから、私は迷ふことなく、私は右翼だと言つてゐるのです。さうすると、昔の外務省の同僚の、私とちよつとぶつかつた連中は、あいつは右翼團體だ、そのうち街宣車で外務省に來るんぢやないか、と言つてゐますが、私はさういふレベルで言つてゐるのではないんです。

今憲法改正の議論が出てゐて、これは民主黨にも自民黨にも改憲論者は澤山ゐますが、さういふ若い人たちの中

で、心配なことがあります。國民投票法を作つて、理想的な憲法を作ることができるといふ話を聞くと、ちよつと心配になつて來るんです。憲法は作ることでなく、發見することなんです。それですから、究極的には成文憲法がなくなるといふのが、私は、日本の理想ではないかと思ふんです。

それと同樣に、教育敕語は作つたものではない、あれは發見したものなんです。當時の歷史的な狀況の中において發見したものですから、マッカーサー司令部が禁止しようが、日教組が反對しようが、教育敕語は我々の心の中に殘つてゐるわけなんです。ですから、かういふものを發見して行く根本の所が、國體論で、國體論なき憲法論というのは私は危ふいのではないかと思ひます。

私は、裁判で二回ほど、有罪の判決を言ひ渡されたんですが、誰が決めてゐるのか、主體がないんです。學生時代、京都地方裁判所、傍聽に行つたことがあります。そしたら、京都地方裁判所の眞ん中に大きな穴が二つ空いているんです。何だと思ひます？　菊の御紋章の跡です。戰爭が終るまでは、裁判所には菊の御紋章があつたのです。そして、天皇陛下の名において、判決が言ひ渡されたのです。國體の根本といふことがどういふ形になつてゐたかといふことが、今の日本の裁判では稀薄になつてゐる例だと思ふのです。

二、半田一郎先生から學んだこと

實はそのことと、新假名遣、そして新字體の漢字ができて、歷史の連續性が切斷されてしまつてゐることとの間には、深い關係があるのではないかと思ふのであります。そのことを強く認識させて下さつたのが、半田一郎先生です。

半田一郎先生といふ人はそんな有名な先生ではありません。マスコミにしよつちゆう出てくる先生ではありません。學術論文をたくさん書いてる先生でもありません。しかし、大變なベストセラーを一冊殘したのです。正確に言ふと改訂版ですが、「英語四週間」です、大學書林の。戰前の英語四週間が、終戰直後に改訂されて大ベストセラーです。これで家を建てたとおつしやつてゐました。（笑）しかし、今でも、小學校だけを卒業した人を對象に、高校一年生の一學期までの英語を終へるやうな作りになつてゐますが、音韻論からきちんと入つてゐます。

私、週刊東洋經濟に、「知の技法　出世の作法」といふ題の勉强法の連載をしてゐますが、それで紹介しました。今も生きてゐる本なのです。昭和三年に初版が出て、いま

だに生きてゐる英語の學習書なんていふのは、本當に歴史的な本なんです。

この半田先生と私はどうして出會つたか、實は四谷驛から歩いて三分の所ですね。大學書林國際語學アカデミーといふ學校があるんです。五十五箇國語を教へてゐる。その中に琉球語のコースがあります。私、琉球語を勉強してみたいと思つたんです。そこに行きましたら、半田先生が一回目の授業に出てゐたんです。琉球語の授業、五回で、授業料いくらだと思ひます？　九萬八千圓です。一回二時間です。語學の勉強は憶えないとならないことは多分二つだけなんです。語彙と文法なんです。ですけれど、ただで勉強してもなかなか頭に入らない。腹に應へるくらゐの金を出すと、人間といふのはケチンボですから、この時間はとりかへさなければいけないんです。（笑）ですから結局、掛かる時間とお金が成果に比例するので、初歩の段階でたくさんのお金を出したはうが、速いし、安上がりになるといふのが私の經驗なんです。

ロシア語を學習する

外務省といふところは女工哀史と同じ所ですからね、ロシヤ語を勉強する人間といふのはソ聯に送らなかつたんです。アメリカかイギリスの軍隊の學校でロシア語を勉強するんです。どうしてだと思ひます？　モスクワ大學でも、外交官用の講座があるんですよ。ロシア語が特に下手になる講座なんです。資本主義國の外交官だけに特別の授業をやるんですね。外交官はみんなスパイです。スパイ活動をできなくするためには語學が下手であればよい。

それで、モスクワ大學の八階の外國語言語學部。その中に、人文系外國人コースといふのがあるんですが、そこでは、日本の外務省の研修生は、その授業以外、聞いたらいけないんです。私、外務省からの研修生でした。それ以外にゐるのは、東ドイツの學生、シリアからの留學生、ノルウェーから來てゐる人はノルウェー共産黨員でした。あと、日本人が途中から、もう一回だけ入つて來ました。日本共産黨中央委員會の赤旗記者です。

因みに赤旗の記者といふのは、私、ソ聯崩壞のときに祕密文書を讀んで驚いたのですが、赤旗の記者ぢやないんですね、ほんとにやつてゐることは。日本共産黨中央委員會國際部から、革命に關する調整をするために、ソ聯共産黨中央委員會に派遣されてゐる代表なんです。コミンテルンの傳統といふのは、ソ連が崩壞するまで實際生きてゐたわけなんです。

それで祕密文書でいろんなものが出て來るんですよ。日本共產黨から留學生を送るんだけど、點數が足りないから裏口入學させてくれ、とかですね。あるいは表面上は日本共產黨とソ連共產黨は喧嘩してゐることになつてゐるんですけども、住宅手當、通信手當、全部ソ連共產黨中央委員會が出してゐるんです。かういふわけですから、やはり、この共產主義といふイデオロギーの强さ、これは相當のもんだつたなあと感じたわけなんであります。

さて、イギリスの軍の學校といふのは、これはひどい話なんです。當時、一ポンド、二百五十圓ですが、一週間の授業料、いくらだと思ひます？　三百四十ポンドですよ。九萬圓くらゐです。私が外務省に入省したときの、月給が八萬七千圓ですから、それで週九萬圓の勉强をしろといふのです。外務省は一應お金は貸してくれるんです。ですから、その返濟で、外務省を辭めるに辭められないやうな狀態に、ロシア語を專攻した人たちは全員なるんです。しかも、將校宿舍に住まなきやならないから、宿舍も、イギリスの納稅者でないといふ理由で、一週間に七萬圓くらゐ取られました。

一週間に十數萬圓をかけて勉强する。そのかはり嚴しいですよ。毎日二十七箇單語を憶えて來なきやいけないんです。とりあへずは六つから八つ。一週間に一回、小テスト。九十點以下を二回取ると退學。二箇月に一回大テスト。八十點以下だと退學。三十人の學生のうち、私は二番で卒業しました。一人だけどうしても拔けない奴がゐました。ケンブリッジ大學を卒業した、イギリスの潛水艦乘りでしたが、こいつは拔群に記憶力がよかつた。

さういつた經驗があるから、檻から出て來て、琉球語をちよつと勉强したいなと思ひました。

それも、きちんとした所で勉强しようと思つて、一番最初に出會つたのが半田一郎先生なんです。半田先生は、一九二四年生まれ、殘念ながら、今年の八月三十一日に御亡くなりになりました。それも本當に殘念なことに、練馬の御自宅のそばを歩いてゐるときに、奥樣を十數年前になくされますから御一人で自炊してゐて、晝のおかずを買つて、青の橫斷歩道を渡つてゐる所を、右折したダンプカーにはねられて、五時間後に御亡くなりになつたんですね。息子さんはをられませんでした。ですから、私は半田先生の最後の敎へ子になるんです。

この半田先生といふ先生は、東京外國語大学の學生の時に學徒出陣で、陸軍に取られました。そして、陸軍の船舶本部に行きます。日本の陸軍といふのは大したもので、世

界の陸軍でも珍しいと思ふんですが、航空母艦を持つてゐたんです。「あきつ丸」といふ名の航空母艦を持つてゐました。船舶本部といふのは、中小國の海軍くらゐの力があったんです。

半田先生が軍にとられたのは戰爭の終りでしたから、「レ號艇」といふ、これはベニヤ板で作ったモーターボートで、米軍が本土上陸を迫つたときには、一トンの火藥を積んだこのモーターボートで體當たりする、その訓練を瀬戸內海で受けてゐたわけです。そのとき、一緒に學徒出陣した友人が沖繩出身の金城君。その人が沖繩戰で戰死してゐますが、その彼に對する思ひがあつて、半田先生は琉球語を始めたのです。そしたら、いつのまにか、琉球語の、日本の第一人者ぢやない、世界の第一人者になつてしまつたんです。

半田先生は日本の外務省のことをよく知つてゐました。日本の外務省の研修所で、ノルウェー語の先生をやつたほどです。先生は學徒出陣のときに、どうしてもこれだけは知つておきたいといふことで、デンマークの天才言語學者で、オットー・エスペルセンといふ人の「文法の原理」といふ本を三分の二だけ譯して、それを、私は戰爭で死ぬんだ、誰か殘つた者が引き繼いで譯して欲しいと思って預けて行つた。この本にはロシア語は出て來るわ、デンマーク語は出て來るわ、あるいはラウティッ（ソルブ）語なんていふ、東ドイツの中の、東部のスラブ系の言葉は出て來るわ、ありとあらゆる言葉が出てきてなかなか飜譯できないんです。それでその種の言葉も、全部やらうといふことで、戰後、その飜譯を繼續する中で、いつのまにか、四十箇國語くらゐを解するやうになりました。そのうちの七、八箇國語くらゐで論文を書くことができる、かういふ先生なんです。

ですから、授業のときに、「聖書を少し譯してみませうか。あなたはコイネーをやりましたね」。コイネーといふのはギリシャ語で「共通語」といふ意味ですが、しかし、これは今のギリシャ語の共通語ではない、一世紀に話してゐた、イエスが死んだ後くらゐに話されてゐた、共通語のギリシャ語のことなんです。

「はい、コイネーやりました」

「それぢやあ、コイネーをベースにして飜譯をしてみませう。何が解りますか」

「さうですね、やつたのは」

「漢文を學校でやつたでせう」

「さあ、あまり、覺えてないです」

「神様のことを上帝と譯してゐる漢譯の聖書があります。あれは比較的漢文に近いですから、あれにしませう」

「それからドイツ語、チェコ語も」

「それから、ロシヤ語の聖書で、私はロシヤ語はよくできないのですが、この聖書の飜譯は十九世紀くらゐの飜譯で、ベースは教會スラブ語で、その後は、セプトゥァギンタ、七十人譯というギリシャ語の聖書譯ですから、ヘブライ語からは少しずれてゐますが、まあ參考にはなるでせう」なんて言つて、飜譯をするときに、六七箇位私の解つてゐる言語の譯で資料を準備してくださつた。

沖繩語

それで、コイネーから琉球語の飜譯をするんです。ところが困つてしまつた。神は愛なり、といふときに、琉球語で、愛に相當する言葉がないのです。これはカナシュン、愛するにはカナシュンといふ言葉はある。「悲しい」といふ言葉なんです。「悲しい」といふ言葉はずつと語源的に探つて行きますと、人事を超える力で、人間の心をプラスの方向へ動かす、もしくはマイナスの方向へ動かす、どちらでもいいんです。さういふ力を「悲し」と言つた。これが、琉球語の場合には、プラスの方向に動かす。その意味で使はれるやうになつたから、ギリシャ語でいふところのアガペー、一方的な無私の愛ですね。こんな言葉になるといつた勉強をしたのです。

その先生が第一回目に私に下さつた資料といふのが、「佐藤君、國語問題協議會つて知つてゐますか」

「名前はもちろん聞いたことがありますが」

「國語問題協議會に行つたことがありますが、平成九年九月一日發行の會報に、私が平成八年五月二十五日に行つた『沖繩語の重み』といふのがありますから、まづ、これを讀んでみて、沖繩の全體像を捉へてみませう」。

沖繩語といふものの發音を聞いて、大多數の日本人は、これは日本語ぢやない、と。それは人間の顔を見るのに、こつちしか見てないんです。もう一つ、こつちの顔がある。この兩方をみて、實は立體的に國語を理解することができる。この話をきちんとした反應で解つたのは、國語問題協議會の人たちだつた。かういふお話だつたんです。

琉球語は大變なんです。沖繩方言は大變なんです。正書法の規則が決まつてゐないし、近代の散文法が成立してゐないんです。それですから、文法をおぼえ單語をおぼえただけでは、文章にならないんです。

よく方言ニュースとかなんとかやつてゐるんですけども

その方言ニュースといふのも、ほとんどの言葉といふのは、今、標準語で使つてゐる言葉をそのまま置き換へてゐるだけで、しかも、一日置きに、首里の言葉と那覇の言葉で交代に放送してゐるんです。これ、だいぶ違ひます。

今日天國にいる先生に聞いてもらはうと思つてですね、今日の皆さんへの挨拶の入り口の所をちよつと琉球語で。

ハイサイグスーヨ、

チューガナビラ

こんな感じの表現になります。これだけでは、果してこれは何語なんだろうかといふことになるのですが、たとへば、「チュウ　ウガナビラ」といふのは、「今日、拜み侍ります」といふわけです。おそらく平安の時代に行けば、これが相當程度通じた可能性があるのです。それから今、百人一首の稻葉修至先生が重ね言葉の話をしてをられましたね。同じやうな言葉を重ねるといふのが、沖繩の言葉の中では組ごとに沖繩版のレーゼドラマの中で使はれてゐる。現在の書き言葉の沖繩語をもう一回蘇らせるとすれば、さういふ傳統もきちつと蘇らせなければいけない。

國體論との關はり

國體論の觀點からすると、沖繩は非常に重要なんです。

實は、私、母親が沖繩出身で、父親は東京ですから、今の沖繩の狀況が非常に心配になつてゐるんです。水戸黃門のシリーズの中で、「琉球編」といふのはないんです。最後の「この紋所が見えないのか」とやるときに、「これ、なんだ」といふ話になるんです。薩摩を知つてゐた人はゐますが、その背後に江戸幕府があることは知らない。ただ、より深刻なことは、朝廷があるのを知らないんです。沖繩は、古事記、日本書紀の神話を共有しない日本なんです。

逆に、さういふ地域であるがゆゑに、沖繩人の一部に過剩に本土に同化してゐる所もあります。ただ、私は、沖繩が外側だといふことは非常に重要だと思つてゐます。なぜならば、日本は單なる國民國家でないからです。私は我が日本といふのは帝國だと思つてゐます。小さな國民國家に納まるやうな民族ではなく、世界史的な使命を果すことを義務づけられてゐる。さういふ民族なり國民であると思ひます。大東亞戰爭の敗北の結果、その世界史的使命といふのは、達成出來なくなつてしまつたやうに一見思へた。しかし、沖繩といふ外部地域がある。その外部地域をなんとなく包攝させる方法にあれだけ難しい對米交涉行つて、日本は成功したわけです。

それから日韓併合百年のことになりますけども、韓國の

ことを日本の外交官の中で、最も眞劍に戰後考へ、それを言語化することに成功したのは岡崎久彥大使ですよね。岡崎大使は、『隣の國で考へたこと』といふ形で、日韓の間で違ひを承認し、そこを相互に認め合ふといふ、この考へ方を提示したのです。岡崎大使の發想の中には、あへて誤解を恐れずに言へば、帝國的な發想があります。これは日本が生き殘つて行くための、私は、根幹になると思ひます。

日韓併合百年ですけれども、當時の國際情勢を考へれば、韓國の中、李氏朝鮮の中、大韓帝國の中は、一部の親中派、かなり大きい勢力の親露派、そして、文明改革をして行かうといふ開明派、日本と手を握つて行かうといふ人達です。そのまま韓國の狀況を放置しておけば、ロシヤによって植民化されることは火を見るよりも明らかでありました。そして、日韓併合、あるいは日韓合邦、かういふ方向で歷史は流れて行つた。一九一〇年の歷史に限定していふならば、その後しばらくのことも加味していふならば、日本がやつたことといふのは、私は、それほど非難されるべきではないと思ひます。少なくとも、當時の帝國主義國としては、品格のある帝國主義國として日本は踏ん張つたのです。

ただ問題は、一九二〇年代後半以後の、神社參拜には大きな問題があると思ひます。神社を作るといふことを韓國でやつた場合に、たとへば韓國には壇君信仰があります。檀君への信仰がありますから、天照大神を祭神とするのではなく、壇君を祭神にすればよかつたと思ひます。それは、氷川神社は素戔嗚尊、大國主信仰ですからね。出雲大社があるわけですから。天照信仰以外への信仰を共有する宗教といふのと國家統合といふのは必ずしも矛盾しないと思ひます。あのときに壇君を祭神にしてゐた場合には、私、日本と韓國の歷史的な關係は、大分違つて來たと思ひます。

因みにそこから學んでゐる人がゐます。誰でせう。金日成、金正日であります。金日成の最後の時代に、壇君の骨が見つかつたといふ大キャンペーンが行はれました。そして、平壤の郊外にピラミッドを作りました。檀君信仰の新しい形を作つたのです。北朝鮮のおみやげものを見ますと、壇君陵がどこにあるかを指す磁石を賣つてゐるやうです。

ここのところで、北朝鮮は日本の近代的な神道の歷史から、國家統合の基本のところでは超越的な國家を統合するやうな何かが必要だといふことがよく分かつてゐるんだと思ひます。アトム（原子）論的な新自由主義で、ばらばらになつてゐる日本人も、あのやうな狀況に置かれて、北朝鮮がなぜ強いのか、といふことを少し突き放して勉强してみる必要もあると思ふんです。

三、文字改革の本質

ソヴィエト・ロシヤ

私たちはなぜ日本を、祖國を思想的に失ひかけてゐるか、ここにおいて、私は、文字の問題も、すごく大きな場を占めてゐると思ふんです。ここで私自身が知つている別の例について、少し話を提起したいと思ひます。ソヴィエト・ロシヤであります。

ソ聯といふ國をロシヤの帝國主義だと勘違ひしてはなりません。現在でも勘違ひされてゐるのは、ソ聯といふのは肥大したロシヤ帝國であって、大ロシヤ人によつて、他の少數民族たちが彈壓されてゐた。かういふイメージです。

これ間違ひです。どうしてでせう。ソ聯の獨裁者スターリン。スターリンはロシヤ語下手です。スターリンはグルジヤ人です。ロシヤ人の血は入つてゐません。より正確に言ふと、スターリンの本名は、ヨシフ・ヴィッサリオノヴィチ・ジュガシヴィリと言ひます。出身の町はゴリです。お父さんは靴屋です。ジュガシヴィリといふ生粹のグルジヤ人はゐません。靴屋さんをやつてゐるグルジヤ人も非常に少ない。ゴリといふ町ではグルジヤ人は少數派です。では、スターリンは、何人でせうか。民族でいふならば、おそらく同化したオセチヤ人です。オセチヤ人の自稱はアラン人です。アラン、イラン、あるいはカタロニヤ、ゴートとアラン、イラン系の民族ですね。

それで、自己意識としては、スキタイ人の末裔だといふ自己意識なのです。世界の歴史の中で、キリスト教からイスラムに歸依して行く人たちは多いのですが、オセチヤ人は例外的に、最初はほとんどがイスラム教徒だつたんです。ところがロシヤ帝國が入つて來た結果、イスラム教のスンニ派からロシヤ正教に改宗したんです。住民の九割以上がロシヤ正教なんです。それだから、帝政ロシヤでも、ソヴィエトになつても、オセチヤ人は第五列として、祕密警察、軍、内務省の中に、强力なオセチヤ人グループによつて、オセチヤ人を經由する形で、コーカサス地域を支配したりする。さういふやうにして、グルジヤに同化した一人がスターリンの一家です。

言語による支配

グルジヤ語つて何語の系統に屬するか、みなさん御存知でせうか。これはコーカサス語系統といふんですが、日本語でも、ヘブライ語でも、アラビヤ語でも、朝鮮語でも、ロシヤ語でも、中國語でもドイツ語でも、主格と對格といふ構造が必ずあります。ところが、世界のごく少數の言葉

に、主格對格構造を取らない言語がある。能格絶對格構造といふものを取りまして、私も三省堂の言語學大百科で何度も讀んだのですけれどよく解らない。ブリタニカ百科辭典を引いてもよく解らない。東京外國語大學の言語學者で、千野榮一といふ先生がいらつしやいますが、その人が大修館から出てゐる『プラハの古本屋』といふ本の中で、世界の言語學者達は、言語學を研究してゐると、だいたいコーカサスの研究になりますと述べてゐます。何故なら、能格絶對格構造が面白いからです。因みにチェチェン語もコーカサス系の能格絶對格構造を持つてゐます。動詞の變化表は非常に作りにくく、グルジヤ語の動詞の變化表を作ると、一つの動詞がどのくらい變化すると思ひますか。一萬五千くらゐになります。コーカサス語の中で、もつとも多いと言はれてゐるのが、アディゲイ語です。これは一つの動詞の變化がだいたい二十億くらゐあります。

ヴィトゲンシュタインといふ哲學者がゐます。思想の違ひは言語の違ひだといふことを言つたのですが、スターリンがどうして獨自の發想を持つたのか、そして、チェチェンでなぜあのやうな不思議な紛爭が起きたのか、このあたりはあの邊のコーカサス言語の構造と關係してゐるかも知れません。

このスターリンといふ人が、ソ聯の帝王として君臨してゐたんですね。ソ聯とは何か。ソ聯の權力の中心は民族ではありません。共產主義というイデオロギーによつてできあがつた、人爲的な權力の中心なんです。ソ聯共產黨中央委員會が權力の中心でした。絶大な權力と權限があるが、責任は一切負はないでいい。かういふ權力の中心です。ですから、二重構造になつてゐるんです。

ソ聯共產黨中央委員會の日本課といふのがありました。五人くらゐしかゐないんですよ。

そこの親玉がとんでもない奴。イワン・コワレンコ。これが、ソ聯のシベリアの日本の収容所長。對日工作の中心になりました。自民黨も社会黨も共產黨も、みんなコワレンコ詣でをしているのです。もつとも、日本の公安部も優秀です。コワレンコが來ると、分刻みに何をしたのか全部記録してゐます。どこかの女性と一緒にホテルに入つてそのまま何時間出て來なかった。全部記録が殘つてゐます。このコワレンコといふのは、ソ聯共產黨の中央委員でも、中央委員候補でもないのです。單なるヒラの事務官なんです。最初は。途中から課長さん。課員四人の課長さんです。しかし、これが外務大臣より偉いんです、實際は。ソ聯共產黨中央委員會が外務省に何か指示します。外務省がその

指示を守つて成功したら、その成果については、ソ連共産黨中央委員會と分配するわけです。そして、もしうまく行かなかつた場合、その場合は、なんで教へたとほりにやらないんだといふことで、外務省が全責任を取るんです。ソ聯共産黨中央委員會は、權力の中樞ですから、絶大な權力權威を持つてゐますが、一切責任は取らないのです。

これは、官僚にとつては理想的ですね。紙に書いたことがそのまま實現できる。さうすると、黨の機能を强化して、黨を非常に强くして、そこのところから、霞ケ關の官僚に指示をして行くんだと言つてゐる政黨がありますが、知らず知らずのうちに、ソ聯共産黨みたいなモデルを志向してゐるわけです。さうすると、官僚支配の打破と言つてゐますが、それは正確ぢやない。新しい民主黨といふ黨の官僚支配が始まるといふことです。さうなつた場合に、國會議員といふ外交官試驗も國家公務員試驗も合格してゐない新官僚たちですからね。さて、さういふ官僚主導がいいのかどうか、考へなければいけないわけなのであります。

ソヴィエトの文字改革と日本のチャイナスクール

このボリシェヴィキ達。彼らが一番最初に何をしたかといふと、文字改革なんです。その結果、何が起きたといふことを考へてみると、實は、今、この新假名遣で起きてゐることと相當程度重なる問題があるのです。ボリシェヴィキ達は、ロシア語から三つの文字を外して、一つの記號の使ひ方を變へたんです。その結果どうなつたと思ひますか。壓倒的大多數のロシヤ人はロシア革命以前の文獻を讀めなくなつてしまつた。三つの字を外して、一つの記號の使ひ方を變へるだけで、テキストといふのは讀めなくなるのです。

日本の外務省にチャイナスクールと呼ばれるグループがあり、さまざまな問題をかかへてゐますが、そこに一つの特徵があるのです。日中國交正常化以前に、中華民國、臺北に留學した外務省の研修生たちと、その後、中華人民共和國に留學した外務省の研修生では、違ひがあります。現役の、或る年代以降の外交官のほとんどといふのは、四書五經が讀めません、漢文が讀めないんです。中國の簡略體の形で中國語を學んでゐますので。これも、ソ聯の文字改革と本質的に同じですね。中華人民共和國以降に書かれたテキスト以外は、特別な訓練を受けないと讀めない。歷史の連續性を遮斷してゐるのです。そして、中華人民共和國の場合もソヴィエト聯邦の場合も、古典の中から、ソヴィエト政權あるいは中共の政權にとつて都合のよいものだけ

を新字體として普及するやうにしたのです。舊字體のものは圖書館の中にあるのですが、それは、特殊な訓練を受けた人しか讀めない。

ウクライナの場合

かういふふうにして、事實上の通時的な歴史を通じた情報の切斷をしたわけなんです。この問題に對して、ロシヤも相當の人が抵抗しました。この舊字を使つただけで强制收容所に送られたんです。ただ、直ちに殺されるといふことにはならなかつた。ところがウクライナの場合には、もつと深刻な問題が出たんです。ウクライナ語では、ロシヤ語とだいたい似てゐるんですが、ロシア語では、アーベーヴェーゲーデー。ウクライナ語はアーベーヘーゲーデー。一文字、ゲーといふ字があります。横濱のことをロシア語ではヨコガマといひます。HとGの發音といふものが、ロシヤ語にはHの發音がないですから、Gの發音でヨコガマといふわけです。ですから、ヘーゲルはゲーゲリ。ちよつと聞いただけでは解らない。

ウクライナ語はHとGを分ける、このGを禁止したのです。Gで書いてゐる文章をもつてゐると、運が惡いと銃殺にされました。ウクライナのキエフではウクライナ語をしやべつてゐる人はあんまりゐないんです。もともとはみんな、ウクライナ語をしやべつてゐたんですよ。因みに私は外務省でモスクワにゐるときに、ウクライナ語とベラルーシ語の研修を受けました。外務省といふのは、いい會社でしたよ。意慾的に新しい言語を勉强するときには、一月に十五萬圓くらゐ授業料を補塡してくれました。餘計な勉强をしたくないとみんなはあまりやらないんですが、私は、ウクライナ語とベラルーシ語を二年づつ勉强したんです。そのときに、知つた歴史の話なんですけども、ウクライナで、ウクライナ語を話す人は西の人たちなんですね。ウクライナ情勢、一番詳しい國はどこかといふと、カナダなんです。カナダで三番目に多くの人が話してゐる言語つて、ウクライナ語なんです。一番が英語、二番がフランス語、三番がウクライナ語なんです。その關係について、今から話します。リヴィフとか、イヴァーノ・フランキーウシクとか、さういふやうな西ウクライナの、ガリチヤ地方と言ひますが。ここはもともとユダヤ人の多い所でした。ロシヤ帝國には所屬してゐないで、ハプスブルグ帝國に所屬してゐました。この地域がソ聯に併合されるのは、一九四五年です。要するに、ソ聯赤軍がナチスを追つて行つたときに、もともとはポーランド領だつたこの領域を占領するわ

けです。そして、ここのガリティヤに住んでゐる人たちは、ニコライ堂と同じやうにイコンを拜んで、お坊さんは結婚してゐる。御香をたくさん焚きますが、その御香は聖靈が出て來ると考へるからなんです。ところが、見た目はロシア正教なんですがカトリックなんです。ユニア會といふ特殊な特殊なカトリック教會なんですね。要するに、今までの傳統は變へなくていいが、そのかはり、ローマ教皇が一番偉いといふことと、聖靈がどこから出て來るかといふこと、父と子から出て來ますから、教義の問題、そこのところだけ正教に合はせてくれれば、後は全部今までの傳統どほり、ロシヤ正教と一緒といふことでどうですかと、十六世紀に手を打つたのです。

あの邊りは歷史的には、宗教改革が、つまりプロテスタントが強かつたのです。そこで、イグナティウス・ロヨーラとかフランシスコ・ザビエルとかの、イエズス會が攻め入つたのですが、勝ちすぎて、この領域の正教の世界まで入つて來たんです。それで、ロシア正教を裏返したので、業界用語では、東方歸一教會、ユニア教會と言ひます。

このウクライナの人たちは、さつき話したGを使つてゐました。Gを使ふのは禁止なんです。發音でGを使ふのはいいが、この字を書くことは、反ソ活動だから許さない。一九五〇年代の半ばまで、ウクライナでは反ソ。そして、ソ連の支配を潔しとしないウクライナの民族主義者たちは、外國に移住するんです。もはやアメリカはいつぱいなんです。ヨーロッパは移住する餘裕がないんです。そのとき受け入れてくれたのがカナダでした。

それで、カナダのエドモントンの周邊にウクライナ人が集中して住んで、今もウクライナ・コミュニティを持つて、ウクライナ語を使つて、そのウクライナ人たちが遠隔地ナショナリズム。アメリカのアイルランド人のやうな役割で、ソ聯崩壞のプロセスに大きな影響を與へたんですね。

四、外務省での經驗と『神皇正統記』

このGの問題。さらに、三つの文字がなくなつて、一つの記號が使はれなくなつた問題を私が大きく意識したのは、外務省の教育係をやつたときなんです。外務省からある日言はれたんですね。おまへは情報を取つて來るのがうまい、そのノウハウを一人でかかへてないで、チームを作つて、そこに傳授しろ。話はつけてやるからと言はれた。部屋も、外務省の今のオペレーションルーム、昔のオペレーションルームではない、新館の地下ですね。そこに部屋を作つてもらつて、何人かのチームメンバーを集めた。その

ときに、過去の歴史から何を學んだらよいのか。

まづ、語學のできる連中を集めたんですね。ロシア語の專門家だけでなく、朝鮮語の人もゐました。ヘブライ語の人もゐました。そこのところで、日本の國家について、きちつと考へる。かつてこの同じ問題に直面したのが陸軍の中野學校だつたんです。豫備士官學校出身の人たちから情報の專門家を作らうとしたんですけれど、豫備士官學校の連中といふのは、軍隊に入つてきて、キャリヤをつけて、外に出てしまはうと考へてゐる。どうやつて、軍隊の中にとどめるか、そのためには國史をもう一回勉強しなほしたはうが解るのではないか。吉原政巳先生なんかが中心になつて、それをやられたんですね。そこで、私もその經驗から學んで、日本の古典を勉強する勉強會を週一回づつ始めました。テキストに選んだのが、北畠親房の『神皇正統記』であります。岩佐正さんの校註ではなくて、山田孝雄先生が戰前校註されたものを使ひました。すばらしい本ですよ。「大日本（おほやまと）は神の國」で始まつて、なぜならば神の國だからだといふことなんですが。重要な問題は必ずトートロジー（同語反覆）なんです。神道の原理からいふと、言擧（ことあげ）しないわけですから、理窟にできない。ぢあやどうしたらいいかと言つたら、北畠親房はすごいですね。天竺震旦と比べればいい、インド、中國に比べて比較思想史の方法です。さうすると、中國といふのは王統は實に亂雜きはまりない。そしてそれを調べてゐるうちに、日本國家の生き殘る原理はどこにあるか、强さはどこにあるか、それは、いかなる宗教も認める。學藝も認める。相互に尊重し合ふ。さういふ方針の國家政策をとることができる。かういふ考へは非常に勉強になります。

このやうに『神皇正統記』をしつかりと讀み始めたのですが、外務省に入つて來る連中ですから、キャリヤ試驗でも、ノンキャリヤ試驗でも、そこそこの受驗には强い連中のはずなんです。ところが、ある世代から下はまつたく讀めないんです。私の記憶が正しければ、昭和五十八年に高校に入學した以降の世代です。學習指導要領が變つたんです、大きく。漢文が殆どなくなつた、古文の時間が壓倒的に減つてしまつた。しかも、大学の入學試驗から、古文の設問が殆どなくなつてしまつた。そのために、高校段階で古文を眞面目に勉强してゐないんです。歷史的假名遣が全然讀めない。かういふ狀態になつてゐたわけです。そこで、もう一回古文の教科書を買つて來て、古典なんぞを讀んだはうがいいと言つたんです。

そのとき私が話したのが、ウクライナ、ロシヤの連續性、

斷絶性の話でした。戰後、意識してゐないけれども、我々の思想や文化に斷絶が起つたのは、このをかしな文字改革と當用漢字、常用漢字とか、をかしな形での漢字の制限のためであり、これはソヴィエト・ロシアで起きたことを反復したものだ。しかし我々は國家に対して責任を持たないといけないから、我々の歴史を取り戻さなければいけない。まあ、そんな話をしたわけです。

みんな一生懸命やつてくれました。それで今も、後輩たちが活躍してゐるのを、新聞で見たり、テレビで見たりすると私は嬉しい思ひをするんですが、これは、私は彼らとは一切連絡を取つてゐません。どうしてかといふと、私は公務員なのに罪を犯した、無罪で爭ひましたけれども、國家は私が犯罪を犯したということで斷罪したわけです。その國家意志を尊重しなければいけないといふのが理由です。國家の枠の中で働いてゐる以上は、外務省のために、日本國家のために精一杯頑張つてもらひたい、それが私の思ひを繼いでくれることになる、と私は強く思つてゐるのです。

それですから、今回も、尖閣沖事件で、海上保安廳の人が情報を漏洩したことに關しても、私は、非常に嚴しい形での批判を産經新聞にも書いたし、朝日新聞にも書いた。なぜならば、もしそれをやりたかつたら、外に出てなくてはいけない。田母神さんの例とは違ふんですね。田母神さんは、自らの考へといふものを自分の名前できちんと發表した。そして、それに対して防衛省が取つた對應はあれでよかつたのかどうかといふ議論の種です。しかし、今回の海上保安官が取つた對應というのは、海上保安廳、それから自衛隊といふのは武器を扱ふことのできる特別な官廳ですから、そこの中で、自分が考へる所の正義感によつて何かの行動をしてよいといふことを認めるといふのは、私は、秩序の觀點から非常に問題があると思つてゐます。

たとへば、杉原千畝さんの問題に關して、杉原さんの禮讃の傾向が出てゐるときに、岡崎大使は、警鐘を鳴らしたことがありました。組織には秩序といふものがある。杉原さんのとつた選擇は一つの選擇ではあるが、役所の中で、特に外交官といふ國家を預かる者が、秩序を破つたことを禮讃するやうなことは、國家といふ觀點からいかがなものかといふ問題提起をしたのですけども、これは私は非常に重大な問題提起だと思ひました。

とりとめのない日本の外交とロシア

尖閣の問題についても、北方領土の問題についても、な

ぜ日本外交はこんなにふにやふにやしてゐるのか。外交官の能力がとりわけ劣つてゐるといふことはありません、基本の思想の問題なのです。時代の轉換が理解できてゐないといふことです。

ロシヤに限定して話しますね。ロシヤつて、普通の帝國主義國なんです。共産主義イデオロギーによつて、全世界を席巻するといふことは考へてゐませんが、帝國主義的に、自分の利益だけ擴大しようとしてゐるんです。どういふことなのか。とりあへず、相手のことなんか考へないで、自分の利益だけを徹底的に主張する。相手が怯んで、他の國も靜かにしてゐたら、しめしめといふ形で、自分の權益を擴大するのです。

相手が、「おまへ何やるんだ、とんでもないぢやないか」と言つて、國際社會がロシヤのやりすぎだといふふうになつた時には、結果として損するな、これ以上やつてゐたら。それならば國際協調に轉じようといふことになるのです。ロシア人が戰略的といふのはどういふことか。戰略的パートナーシップといふのは、ひらたく譯せば、いきなり刀を拔いて後ろから切りつけない、とか、第三者の見てゐる前で殴りかからない、その程度のものです。ですから、中露の戰略的パートナーシップとかで勘違ひする必要は全然ありません。中國も帝國主義國の原理で動いてゐる。それが見えてない。

たとへば、東京宣言。四島の歸屬に關する問題を解決して、平和條約を締結する。日本のマスコミは、朝日新聞から產經新聞まで、東京宣言をベースとすれば、北方領土は歸つて來ると思つてゐる。大いなる間違ひです。四島の歸屬に關する問題の解決といふことは、日本に返すといふことと一緒ぢやありません。ロシヤ人の理窟からすれば、ここに四億圓ある。四億圓がどつちのものになるかといふことについて合意しただけである。四島は、日本四・ロシヤ〇、日本三・ロシヤ一、日本二・ロシヤ二、日本一・ロシヤ三、日本〇・ロシヤ四、この五通りがある。日本がふにやふにやしてゐるんだつたら、ロシヤ四・日本〇とそれで、平和條約を作らうと、平氣でさういふことをします。今回日本の外務省の人たちは、北方領土にこのタイミングで、今日まさに今くらゐの時間にメドヴェージェフさんと管さんが首腦會談で會つてゐると思ひますけれど、その二週間前に、いくらあのロシヤであつても北方領土に行くことはないだらうと思つてゐた。しかし、ロシヤというのは、普通に讀んだら、行くことは明白なんです。九月二十九日にメドジェーヴェフが、近く行くと言つたから。日本は反撥

した。しかし、この程度の反撥だつたらいけると讀んで、十月二十六日に、「ロシアの聲」といふ舊モスクワ放送が、それも日本語放送で、「メドヴェージェフが行つてもエキセントリックな反應をしないやうだ。大使の召還をしたはうがよいといふ新聞もあるけれども、一つだけあるが」。これ、產經新聞ですね。「しかし、そのやうな反應は日本ではあまりないだらう」と、馬鹿にしてゐるわけです。

行くのは確實だぞと私は三十日付で產經新聞に書いた、行くから今それを阻止する動きをしろと。ところが、外務省は、その週の金曜日、新聞記者が集つても七時になつたらロシア課の幹部は皆ゐない、聞いてみたら、もし行くんだつたら、私たちに情報入つてますよと言ふ。ところが、その翌日に、ユジノサハリンスクに總領事館があるのですが、大統領專用機の旗のついた、二機飛行機止まつてゐるんですよ。行くに決まつてるではないですか。新聞記者が集まつてゐる。ところが、前日の外務省ロシア課は、電話番の若い女の子一人しかゐないんです。なぜさういふふうになつてしまふのか。自分の考へに合はせてしか、ロシヤ人が動くことを捉へられないからです。ロシヤ人の內在的な論理を捉へることができないわけです。裏返せば、ここのところで、ロシヤの內在的な論理といふものを捉へることができれば、それに對應する動きがその場でとれるわけなのですが。

五、國語問題協議會の活動に期待する

重要なことは、今時代が帝國主義に變つてゐることです。この時代の讀み取りをきちんとできないから、民主黨のこのへなへな外交が起こつてゐるんです。ところが、このへなへな外交、民主黨から自民黨に變つても、多分へなへなんです。そのへにやへにやになつてゐることと、日本のエリートが古典との連續性を失つてゐるといふことの間には關聯があるのです。

そこで、國語の問題に戻りますが、「大日本（おほやまと）」は神の國なんです。なぜ日本のやうな、こんな邊境の國が我々の文化と言語を失はずに生き殘ることが出來てゐるのか。戰爭であれだけ潰滅的な狀況にされたのに、ここまで復興してゐるのか、それはですね、高天原で起きてゐることが今も對應して起きてゐるからです。天の秩序と對應して、我々の現在の日本はある。これは神がかり的なことではないのです。我々がここに存在してゐる根本の存在といふものの中にある所の、存在論的な根據、そこを支へてゐるのは神話の問題なんです。ところがかういつた神話の問題を手繰

る爲にも、その道具となる所の我々の言語を讀まなくては、そこに至ることが出來ないのです。

ちよつと長くなつてしまひましたが、皆さんの活動といふのは、まさに、國語論であるとともに、國體論でもあるわけなのであり、日本の外交、日本の國家體制を根源から强化することに役に立つてゐると私は確信してをります。

尊敬の氣持を表明しまして、私のこの拙い講演を終はらせて戴きます。

（さとう　まさる・評論家、元外務省勤務）



國語問題の變化と變質

若井勳夫

昭和から平成へと御代替りを初めて經驗して早や二十年。平成十八年の時は、私が生れた昭和十八年もこのやうに時を重ねてゐたのだと實感しようとした。この經過はただ單に時間が過ぎ去つただけに止らない。敗戰の昭和二十年と現在の平成二十年、政治・經濟・社會・文化のあらゆる面で前代と異なる樣相を見せ、より根本的には、據つて立つ基盤、日本人の生き方、考へ方が變化し、變質しつつあるやうに見える。この變相の一つが國語問題である。昭和三、四十年代から、四、五十年經た現在、國語問題のあり方や中身がどのやうに變つたか、また、變らなかつたかを概觀し、今後の方向を探つていかう。また、時代と人心の變遷に伴つて、國語の根幹に關はる問題が新たに顯在化し、混迷、溶解の度を深めてゐる。この傾向を分析し、對應策を考へていく。

一、　國語問題五十年

（1）全體の動向

福田恆存氏の『私の國語教室』が文藝雜誌に連載されたのは昭和三十三年十月であつた。本書は戰爭直後の二十一年に公布された「當用漢字」「現代かなづかい」がいかに非合理、非學問的で、國語の歷史傳統を斷絶させたかを説き、裏に國字の表音化を策動してゐることを見抜き、日本人の言語感覺を弱體化させたことを指摘した。翌三十四年に「送りがなのつけ方」が公布され、漢字の訓讀みの原理を無視した送り過ぎの批判が相次いだ。そこで、一連の改革を否定し、國語の傳統を守らうとする國語問題協議會が十一月に設立された。翌三十五年十二月には先の『私の國語教室』が單行本として刊行された。續いて、翌三十六年三月、國語審議會が戰後の國語施策を表音派が牛耳つてゐると、五人の委員が脫退し、その專橫を世間に訴へ、やうやく周知されてくる。

このやうに三十年代の前半に今にも漢字が全廢され、國語が平假名かローマ字に表音化されるのではないかといふ動きの中で、いはゆる表意派が正統表記によつて國語を守らうと論陣を張り、熱氣の籠つた戰後十年を畫する時期であつた。

では、五十年たつた現在はどうか。表音派、改革派の運動は影を潛め、消滅に近い。日本ローマ字會は今もまれに

集會の案内が新聞に出るが、かな文字會の動靜は聞かない。平和運動の硬直化、サヨクの運動や雜誌の退潮と軌を一にしてゐるやうである。それよりは世間は戰後何回目かの「日本語ブーム」といはれる。それも言葉の使ひ方や漢字に關する出版物が多い。文字や表記のあり方ではなく、言葉の知識や實用言語、例へば敬語や流行語に關心が移つてゐる。漢字檢定、文章檢定、日本語檢定などが盛んで、言語力の養成が目的となつてゐる。

五十年前は漢字廢止、國語表音化の是非を問ふことを根底に、表記、文字を通して國語の理想が求められてゐた。現在は表音化運動は既に解決、克服され、漢字かなまじり文が定着してゐる。今の學生は明治以降のこの動きを全く理解できず、漢字を全廢することなど不可能であることを直感的に氣づいてゐる。三十年代の前半、中學生の私は今にも漢字がなくなるのではないかと心配してゐたが、それも雲散霧消した。時代の流れの作用はかくなるものである。

(2) 正書法

自國語の規範的な書き表し方、つまり正書法（正字法、オーソグラフィー）を二、三十年代の國語審議會は考へてゐなかつたことが『私の國語教室』で明らかにされた。一連の國語改革は當座の暫定であり、先には表音化の道筋があつたのである。このことが表意・傳統派の努力によつて一般的に知られ、四十一年改組された第八期國語審議會の開會挨拶で、文部大臣は「國語の表記は漢字かなまじり文によることを前提」に審議することを明確に表明した。これは明治以降、文明開化、歐州文化の輸入による表音化の流れを完全に終結させる宣言で、從來の方針を撤回したのである。これより表記や國字のあり方は當然のごとく定着して、關心は變化した。

(3) 假名遣ひ

三、四十年代は歷史的假名遣ひを使ふ文筆家や學者が多かつた。この基盤に戰前、この假名遣ひで教育を受けた中年代以降の理解があつた。舊曆や祝祭日、年中行事を始め、過去の傳統を受繼ぐ精神と生活態度があつたのと同じ質で、文字の書き方にもその名殘があり、一般人もふと昔の假名遣ひを使ふ例も見られた。しかし、全體としては「現代かなづかい」は實質的な規制・强制と受け止められ、官や大きいものに從ふ國民の意識があつて適用されていつた。六十一年に「改定現代假名遣い」が公布されたが、一語の修正もなく（これを認めれば收拾がつかない）、内容は變らず、むしろ追認、確定でしかなかつた。

五十年後の現在、歷史的假名遣ひの使用、支持の基盤は

少數となつたが、右の「改定」の前書きで、「歴史的かなづかいは……我が國の歴史や文化に深いかかわりをもつものとして、尊重されるべきことは言うまでもない」と記された。この價値と意義は評價され、出版社も著者の意向を尊重する姿勢が殘されてゐる。一般にも廣告や歌謠曲などで意圖的に使ふことがあり、その效果も理解されてゐる。平成二十年二月に改定された學習指導要領では古典教育の充實、文語文の朗讀、暗誦を重視してゐる。國歌君が代の正統表記、穴あき五十音圖の是正、いろは歌の指導などの要望も世に出て、部分的ではあるが正統表記の復權への道が開けてゐる。

(4)　送り假名

昭和四十八年に制定された「送り假名の付け方」は通則に「本則、例外、許容」を設け、もともと統一するのに無理があつた。その上、活用語尾を送るといふ原則により送り過ぎが目立ち、深刻な弊害をもたらした。例へば、「聞える、浮ぶ」は「聞く、浮く」があるから、「聞こえる、浮かぶ」に、「受付、受付ける」は「受け付け（る）」にと、冗長で締りのない書き方になつた。これを小學校で強く指導したために、「聞、浮」の訓は「きく、うく」ではなく、「き、う」であると、漢字の意味も考へない、根本的に誤つた認識を生徒に植ゑ付けた。漢字は表意・表語文字であり、それ自體に意味を持つ語である。送り假名法を徹底させると、訓讀みの漢字を決つて一音で讀まうとするため、漢字の意味を考へる態度を衰弱させたのである。この傾向は近年さらに廣まり、漢字を一音で讀むなら、送り假名に惱むより平假名で書かうといふ風潮を作つた。これは漢字一音の表音化を越えた、用言の表音化である。また、學生は送り假名が教へられたものより少なければ、讀むのに戸惑ふ。送り假名を定めた當事者は四十年後に漢字から意味が失はれるといふ根幹を搖がす事態になるとは思はなかつたであらう。送り假名に定式を立てにくいことは、漢字かなまじり文を正書法とする國語にとつては當然のことであり、原則は「少なく送る」で十分であつた。現在、嚴格に守つてゐるのは官廳・新聞社・教科書で、それも用字用語辭典に頼つてのことである。

(5)　漢字

漢字を制限した當用漢字が昭和五十六年に「漢字使用の目安」として常用漢字に改められた。前書きには「各種專門分野や個々人の表記、固有名詞、過去の著作や文書」に及ぼしたり對象としたりしないと示されてゐるが、一般には當用と同じく制限として受け止められた。これは日本人

人の、表記に自己責任を負はず、お上に從ふといふ態度で、實質的に何の變化もなかつた。といふより、その漢字が常用漢字の表內か表外かは日常の言語生活には必要のないことであつた。これはごく自然なことで、自分の表記意識において表現した場合、難しいかどうかを考へれば濟むことである。

五十年を經て、日本人の漢字の意識は大きく變つた。古くから漢字は覺えにくく、書くのに時間がかかつて非能率で、漢字とかなの二重性が煩雜であると言はれてきた。和文タイプライターの利點がかな文字論者が得意なころに大いに喧傳された。しかし、情報化時代になつて、ワープロ、パソコンが急速に普及し、明治以降の漢字への批判が一掃され、文字の書き方が一新された。平假名やローマ字でキーをたたけば漢字に變換されて出てくる。從來の漢字が難しいといふ意識も劣等感もなくなり、親近感を持つやうになつた。

この一大變化によつて、常用漢字では間に合はなくなり、文化審議會は新常用漢字の制定へと動き出した。二十一年一月に、現行のものに新たに百九十一字を追加し、五字を削除する試案が公表され、來年二月に公表の豫定である。これには、今までに强い批判があつた縣名や動物名も入り、三十六字には音訓を追加してゐる。これで敗戰直後の當用漢字の制限の觀念はほぼ消え、少しは自由に自己の責任で使ふ意識が出て來よう。この流れに合ふやうに、人名用漢字も制限はあるものの增加し、制限の撤廢への道がないわけでもない。また、教育において漢字の學年別配當はまだあるけれども、上の學年の漢字を振りがな付きで教へてもよいことになつた。これを認めることは難しい漢字を使つてもよいことで、新聞でも一部、採用してゐる。

このやうに、情報化に對應して、漢字の必要性、漢字使用の自由化の意志が認識され出したのは五十年前には豫想もしなかつたことである。現代假名遣ひが不十分ながらほぼ定着し、送り假名も不統一ではあるが送り過ぎのまま流れようとしてゐることに反し、漢字については一應よい方向にあるといへよう。

(6) 文書作成機器の新たな影響

ワープロ、パソコン、また、ケータイで文字を起し、文書を作る風潮が廣がるにつれ、漢字について新たな問題點が出てきた。それは漢字の使用が增加するだけでなく、過度に使ふやうになつてきたことである。今まで自分で書く時には使はなかつた漢字や漢語を機械が打出してくれる。漢字に隱れて和語の意味合ひや語源の結び付きが失はれ、

實感のない大仰な漢語に頼り過ぎて、實質的な意味を考へなくなる。文字は書くものではなく打つものであり、自己の表記を機械に任せ、責任感が薄れる。初期のころの、入力ミスによる同音異義語や漢字を忘れる傾向より、もつと深刻な事態である。表面的には漢字使用が豊富になつたが、根本的には漢字能力だけでなく、言語能力の退行現象が進行してゐるのではないか。折から、白川靜氏の字源の解明、漢字檢定の人氣により、漢字ブームといはれる。しかし、漢檢は本來の和語に無用な漢字を充て、意味を考へる手づるを斷ち、觀念的抽象的な漢語の跋扈を來してゐる。

表記の機械化は漢字に止らない。歷史的假名遣ひや少ない送り假名で入力すると、赤い波線で誤りと表示される。文字が畫一化され、筆記體が衰へ、日常の行書體が讀めなくなつてゐる。自ら書かずに機械が代りに書いてくれる方式が定着した場合、日本人の言語生活がどうなるか豫斷を許さないものがある。

二、　國語の根幹に關はる新たな問題點

昭和三十年代から五十年、國語問題の動きと内容を概觀すれば、前代は國語問題、國字問題が中心であつたが、現代は漢字問題、言語問題に焦點が移つてきたといへる。

三、四十年代は國字の表音（かな、ローマ字）化、漢字の制限から廢止への運動を阻み、國語を護ることが基本であつた。しかし、平成の今はその動きが衰退、消滅し、情報機器に漢字をいかに對應させ、漢字の過剰な使用の弊害に對處するかといふ課題、また、言葉の教養の衰退、人間關係が稀薄になつたことに由來する言語表現の弱化といふ根本的な問題に變つた。

（1）　國語の根本・本質の動搖

①　國語から日本語へ

今まで意識せず「國語」を使つてゐたのを、「日本語」としてことさらに使ふ例がここ十年で急增した。大學の國語學、國文學は日本語學、日本文學へ、國史學は日本史學へと、「國」を避け、嫌ひ、徐々に消滅しつつある。これは國際時代の流れに乘つて、客觀的、理性的に語學、文學や歷史を研究しようといふ姿勢と强調される。言葉に關する一般的な書物も國語を使ふのではなく、日本語を稱するものが多い。しかし、母國語（これも母語といはれる）の立場と外國人の立場からの研究は同一たり得ない。今、國語の最後の砦は小中高校の國語（科）、國語教育であつて、外國人を對象とする日本語教育と對比して、命脈を保つ。

敗戰後六十年にして、日本人は自國の歴史傳統を忘れ、國の言葉に無關心になり、自身の據つて立つ場を失つてきたのである。

② 縱書きから横書きへ

昭和二十四年四月、内閣は各省に「公用文作成要領」を通達し、「一定の猶豫期間を定め、なるべく廣い範圍にわたつて左横書きとする」とした。これを占領軍は「簡單にして效果的な方法」と稱讃し、半ば强制的に行はれたといはれてゐる。この方針がゆるやかに官公廳から世間一般に侵蝕し、今、横書きが「廣い範圍」に横行してゐる。新聞は縱組を基本としてにゐるが、横組が徐々にはびこり、特に廣告は縱組が少なくなつた。人文・社會系の書物は縱が中心であるが、横も目につく。教科書は國語が縱を唯一、堅持する。縱書きが思考、表現、感情の根源であり、日本文化の基盤といふ指摘もされ認識され出してきたが、實踐にまでは至らない。やはり國際時代、情報化時代のもとに、文化意識が動搖、混迷し、輕薄で放漫な横書きが日本人を侵してやむことがない。

この風潮に對して、私は三年間、學生に異なつた實驗をして、横書きに親しんだ學生でも縱書きの重要性を理解してゐることを證した。また、縱書きと横書きに關して、縱は重み・集中、讀みやすさ・自然流、深み・緊張、内面的な文化力、有機的な締りに對して、横は輕さ・散漫、讀みにくさ・違和感、淺さ・弛緩、表面的な情報性、無機質な崩れであることを論證した。さらに、國語の論理と構造から縱書きが文法的原理に適つてゐること、理解と表現は縱書きによつて適切になされること、右から左へ進む文化が根底にあり、これが縱書きの意識と感覺によつてゐることを論じた。

③ 外來語の增加と變質

外來語が年々、增加してゐることは多くの人が實感してゐる。しかし、その實態が國語の基底にまで侵犯してゐることに氣付いてゐない。外來語は中世末期以來、特に幕末・明治に多く入つてきた。それは事物とともにであり、漢語に飜譯されたのも多い。しかし、近年の外來語はその内容が一變した。例へば、アジェンダ、インキュベーション、インセンティブなど行動や概念を表す語が蔓延した。これが官廳や新聞に使はれても一般には理解できない。語に對應する物ではなく、考へ方、行動樣式、態度を表す語である。國語ではなく、外國語によつて施策が行はれてゐる。これらは新外來語、カタカナ外國語といはれることがある。今や助詞・助動詞の骨格部のみが辛うじて國語の姿を保つて

ゐるのではないか。

さらに、日本國有鐵道（國鐵）の解體で「JR」が普及し、「JA」「JT」など「J」が幅をきかす。オリンピックなどのユニフォームもジャパンとなり、世界野球大會も「侍ジャパン」と呼んだ。かくして、國、日本、ニッポンが消え、自國を外國語で言ひ表すことになつた。「ポップの若者の歌もまるで植民地の歌のやうである。洋畫は今まで國語らしく飜譯し、それが觀客を引きつけたが、今は原語のままが多くなつた。このやうに、外國語を受け入れる意識や態度が根本的に急變した。外國の言葉によつて思考し、行動し、感情を動かす。母國を失つた言葉と文化は眞似をするだけで、創造力に缺け、衰亡していく。

以上の三點は五十年前から昭和の終焉まで思ひもつかなかつたことである。これは文字による表記や呼稱に止る問題ではない。もつと內面の、深いところで日本人が日本人であることの意識、國語によつて考へ、心を耕す生き方が變動、變質してきてゐることを示す。半世紀前、國語問題協議會は設立宣言の冒頭に「國語は危機にある」と謳つた。今、その「危機」は質的により深刻である。國語どころか、いや、國語そのものの危機的狀況ではないか。言語は文化であり、精神である。向後五十年、このやうな言語意識や感覺で、日本人の生き方や言葉がさらにどう變つていくだらうか。

（わかい　いさを・京都産業大學文化學部教授、本會理事）



漢字表による字音語表記の破壊について

上田博和

假名交り文とは、ただ假名と漢字とが交用されて居ればよいと云ふものではない。それは、漢字が我が國に渡來して以後、長年月に亙つて次第にその原理を自ら確立して來た記載法であつて、根本の原理は、概念的な思想は漢字を以てこれを表記し、漢字を以て表記することの出來ない助詞、助動詞や、活用語尾、接頭語、接尾語等は假名を以て表記するところの表記法である。

（時枝誠記「漢字政策上の諸問題」）

1

當用漢字表の時代から、問題は指摘されてゐた。

「や金」（冶金）、「語い」（語彙）のやうな漢字と假名との抱合せによる表記が多く現はれて來て、これを醜態と見る向きもあるが、それは、現行の文字表記の原則、即ち漢字假名交り文の原則から見ての評價であつて、當用漢字表の立場から云へば、經過的現象に過ぎないので、もしこれが不様ならば、全部假名書きにするのがよいといふ主張が出て來るのが當然である。

（時枝誠記『國語問題のために』一九六二年 東大新書 57頁）

最近の教科書には、「当用漢字」以外のものには、ルビを附けるといふことが行はれてゐるが、このやうなルビ方法といふものは、ルビの歴史にはない極めて變則的な方法であつて、これも「当用漢字」といふ非合理的な漢字政策の副産物として現れたもので、注目すべき現象であると云はなければならない。

（時枝誠記「漢字政策上の諸問題」一九五一年、『増訂版 國語問題と國語教育』一九六一年 中教出版 一九五頁）

2

当用漢字表（昭和二十一年）は漢字使用の範圍を示したもので、「この表の漢字であらわせないことばは、別のことばにかえるか、または、かな書きにする」「ふりがなは、原則として使わない」との注意事項があつた。「眉」は表に無いから、これに從ふ限り「眉間」とは書けない。振假名は使へないし別のことばも無いやうだから「みけん」と書くしかないのだが、「間」は表にあるからといふので「みま」と書くことを當局は否定しなかつた。

常用漢字表（昭和五十六年）は範圍でなく漢字使用の目

安を示したものだが、目安の趣旨について「この表を無視して、ほしいままに漢字を使用してもよいというのではなく、この表を努力目標として尊重することが期待されるものである」（答申前文）と書いてあるから、この表を尊重する限り、やはり表外漢字は使へない。「眉」は表に無いから、「み間」とは書けるが「眉間」とは書けない。

改定常用漢字表（平成二十二年）も漢字使用の目安とされるが、「表に掲げられた漢字だけを用いて文章を書かなければならないという制限的なものでなく、必要に応じ、振り仮名等を用いて読み方を示すような配慮を加えるなどした上で、表に掲げられていない漢字を使用することもできるものである」（答申前文）と言ふ。國語は漢字假名交りであるから「表に掲げられた漢字だけを用いて文章を書く」ことなどできないのだが、それはさておき、表外漢字を「振仮名をつけるなどした上で使用できる」とは「振仮名をつけなければ使用できない」といふこと。「眉」は依然として表に無いから、「み間」「眉間（み）」とは書けるが「眉間」とは書けない。改定常用漢字表はさう言つてゐるのである。

3

文化廳の『平成二十一年度 国語に関する世論調査　新しい常用漢字についての意識』（ぎょうせい 平成二十二年十月刊）に國語課作成の質問文（問9・29頁40頁）が載つてゐる。

例えば、「み間のしわ」よりも「眉間のしわ」、「とん着しない性格」よりも「頓着しない性格」の方が意味の把握が容易になると言えます。ただし、「眉間」「頓着」の「眉」や「頓」が読めないと判断されるような相手の場合には、「み間」「とん着」と仮名を交ぜて書くか、「眉間（み）」「頓着（とん）」と振り假名を付けるといった配慮が必要になります。「常用漢字表」とは、特別な場合を除いて、一般に、このような配慮をせずに使用する「漢字の一覧表」という性格を持つものです。

文化廳國語課は「表外漢字は仮名にするか振仮名をつけるかの配慮をし、表内漢字はさういふ配慮をしない」といふ方針を字音語に適用して、「眉間」「頓着」を「み間」「とん着」といふ交ぜ書きや「眉間（み）」「頓着」といふ部分的振假名に改變する。それだけではない。先の引用の直前にかう書いてある。

我が国では、漢字と仮名を交ぜた表記を用いるのが一般的です。この表記を読み取りやすく、分かりやすいものとするためには、漢字と仮名を適切に交ぜて使っていくという観点が大切です。

「漢字と仮名を交ぜた我が国の一般的な表記」とは〈漢字仮名交り文〉であり、主要な概念に漢字を使ひ、漢字では表現で

きない助詞・助動詞・接尾語などに假名を使ふ」といふ國語表記のありかたである。当用漢字改定音訓表（昭和四十七年）にも「我が国では、漢字と仮名とを交えて文章を書くのが明治時代以来一般的になっている。この漢字仮名交じり文では、原則として、漢字は実質的意味を表す部分に使い、仮名は語形変化を表す部分や助詞・助動詞の類を書くために使ってきた」（答申「前文」冒頭）と明記してゐる。先の引用の「頓着しない性格」といふ表記も、「頓着」「性格」といふ主要な概念に漢字を使ひ、「する」「ない」といふ漢字では表現できない抽象動詞や助動詞に假名を使ふ」といふ〈漢字假名交り文〉の原則に従つたものである。字音語の漢字表記を假名との交ぜ書きに改變することは〈漢字假名交り文〉を讀み取りにくく、分りにくくする。

しかるに、文化廳國語課は〈漢字假名交り文〉といふ〈漢字と假名の書分け〉を單なる「漢字と假名を交ぜた表記」とのみ形式的に理解卽ち誤解し、分りやすさのためと稱して〈字音語の交ぜ書き〉を公認する。これは〈字音語の交ぜ書き〉を「漢字と仮名を交ぜた我が国の一般的な表記」として正當化することを意味する。つまり、〈漢字假名交り文〉を根據として〈漢字假名交り文〉を破壞するといふ背理である。

4

答申が出る前の文化廳主催「新常用漢字表（仮称）に関する試案」説明会（平成二十一年三月二十六日・文部科學省講堂）で、林史典國語分科會長は「惧が表に入つたから危惧と書けるやうになつた。今までは常用漢字表に従ふかぎりでは書けなかつた」と發言した。そのときの私の意見。

今の説明では目安といふことの意味が制限と同じに聞える。目安の趣旨をもつと説明せよ。NHKニュースの字幕に頻出する字音語の交ぜ書き例へば「切さたく磨」は今回の漢字表に従ふかぎり仕方のない表記なのか。仕方がないのなら、漢字表など作るのをやめよ。

會場からの質問が五十數件あつた由だが、林氏は私のを讀み上げて、かう回答した。

多くの國民の讀む必要のあるものは多くの人が分りやすい表記をする必要がある。公共性の高い文章については字種音訓の目安として、ガイドラインを作るのが目標。交ぜ書きを認めるくらゐならやめてしまへといふのは、文字教育のなかつた時代から識字教育を經て戰後の漢字政策へと續いてきた歴史を無視することになるので、強すぎる意見だ。（文責上田）

漢字使用の目安だから、表外漢字を使用せずに〈字音語の交ぜ書き〉を認めるのか、それとも、漢字使用の目安だから、表外漢字も使用してそれを避けるのか。林氏は公共性の高い文章について〈字音語の交ぜ書き〉を認めるのである。その後の答申で「表外漢字も振仮名をつけた上で使用できる」といふ趣旨の・試案には無い・文言が追加されたが、それで問題は解決されない。

第四十一回文化審議會國語分科會漢字小委員會（平成二十二年四月十三日）に於て、先に紹介した文化廳國語課による「常用漢字表に関する意識調査」の速報値が報告されたとき、質問文の「眉間」といふ文字表記が話題になつた。議事録によれば、出久根達郎委員が「『みけん』と『けん』も含めて振り仮名を入れた方がよろしいのではないか」と質問し、金武伸弥委員も「新聞では、大体一つの熟語については基本的に眉間なら『けん』まで振るというのが原則になっています」と述べたが、氏原基余司主任国語調査官は「国語審議会時代からの流れとしては、語のうちの表外漢字にだけルビを振るということで来ています。ですから、ここもこれまでの国語審議会時代の流れに沿った振り方をしたということです」と回答した。

表内漢字と表外漢字の分斷による字音語表記の破壞から國語を守るために、漢字表の廢止、少くともその性格の變更が必要である。

——平成二十三年三月——

（うへだ　ひろかず・本會理事）

鈴屋學會と假名遣

中澤伸弘

偉大なる國學者本居宣長翁は、契沖の『和字正濫抄』を讀み、今まで自分が使用して來た、所謂「定家假名遣」の使用を改め、古典に卽した今日言ふところの「歷史的假名遣」を使ふことにしたのであつた。この態度は古典を扱ふ學者の鑑とするところであり、私はこれを常に敬仰して已まないのである。私が國學と言ふものに興味を抱き、その方面に我が意を注ぐやうになつたのはこのやうな國學者を唯々に懷かしく思ふがゆゑである。高校以來一貫してこの假名遣ひを使用して來たのは、その有難い志に倣ふにあつて、單なる懷古趣味に據るものではなく、わが人格の一部となつてゐるものであつた。

ここで所謂「歷史的假名遣」の使用が、我が人格の一部であると書いたが、私とて頑なにその使用に拘はる譯ではなく、その理由如何によつては相手の意志をも尊重して來た。過去に刊行した幾つかの拙著の中には「歷史的假名遣ひの表記では賣れないのでは」と危惧する出版社の意向（果してこれが事實か否かは知らない）を尊重して所謂「現代假名遣」に改變することを認めたものもあつた。（原稿はあくまでも歷史的假名遣表記）

さて先に宣長翁について述べたが、この翁の舊跡鈴屋を保存管理し、また翁の一世の學問を展示、研究する施設として、伊勢の松阪に本居宣長記念館があり、そこに、翁に關はる國學の研究を中心とする學會である鈴屋學會がある。この會は年に一度の研究大會を始め、研究誌である「鈴屋學會報」を刊行してゐて、平成二十一年度で第二十六號まで發行してきた實績がある。私もここに、過去國學に關する幾つかの拙稿を揭載して頂いたことがある。宣長翁に關する學會である以上その表記は當然「歷史的假名遣」に遵ひ、何ら憚る事がなかつたのである。

ところがこの頃どうしたことか、投稿の論考は「現代假名遣」にして欲しいといふ、表記上の要望が出されるやうになつたのである。卽ち、平成十八年度の第二十二号の「鈴屋學會報」の「投稿要項」に突如として「表記」といふ項目が設けられ

論文本文についてはできるだけ常用漢字・現代仮名　遣をお使い下さい。

と書かれてあつたのだ。これを見てこの「できるだけ」といつた曖昧な表現は一體何なのかといふ疑問を抱いたので

あつた。一般にこの「できるだけ」といふ表現には強制と言ふ感覺はなく、「もしよろしければ」「出來ることならば」と言ふ程度と考へるのが普通であつて、もし強制であるなら「投稿原稿は現代假名遣ひに限る」とあるべきであり、それゆゑに以後の私の投稿論文は、「できるだけ現代假名遣」に據らない「歷史的假名遣」に遵つた表記で投じたのであつた。何度も言ふが、宣長翁は「歷史的假名遣」表記こそわが國語表記の正統であるとの認識をお持ちであつたのであり、これは他の學會はともかく、この鈴屋學會にとつては最も尊重すべき事柄であり、このやうに「できるだけ・・現代假名遣」にせよと要求することが實に烏滸がましいことなのである。憤懣やるせないものであつたが、それでもこの「投稿要項」が掲載された以降の二十三號、二十六號には、尾崎知光愛知縣立大學名譽教授が平然と「歷史的假名遣」を使用して論考を發表なさつてゐるのを讀んで、表記の强制はありえないものだとの安堵の氣持を抱いたのであつた。尾崎教授は國語學史の權威でいらつしやる。

然しである。平成二十二年度の第二十七號用に私が投じた論考に對して、編輯委員會名で次のやうな採否の通知が來たのである。これは驚きを通り越して、實に不快極まる惡文であつた。

採用條件について

編輯會議で、現代假名遣の使用を徹底するように、という强い意見が複數出ている。また、『鈴屋学会報』の投稿規定にも「表記　論文本文についてはできるだけ常用漢字・現代假名遣をお使い下さい」とある。

したがって、本文全體を常用漢字・現代假名遣に改めることを採用条件に掲げる。　以上

（原文左横書き）

論戰文の內容を査讀の結果、不採用にするといふのなら、これは誰しもが認めよう。己の力量のなさを託つばかりであるが、これはさうではない。「現代假名遣」に書き改めないと「掲載しない」と言ふ、表現の自由を無視したまさに脅迫文である。納得がいかないのはこの「使用を徹底するよう」と言ふ文言である。これは誰に對する强制なのか。會報の編輯に當つて內々に言ふなら分かるが、私個人に對してであるなら、こんな不遜な書き方があらうか。「できるだけ」でお願ひしておいて「使用を徹底」せよとは矛盾があらう。ましてこの「强い」「複數の」と言うた修飾語は一體何なのか。これは私に對する個人的な攻擊のみならず、歷史的假名遣を使用する方々に對する挑戰であり、文化破壞の宣言である。編輯委員の名は「會報」の卷末に記

されてある五人であつて、そのうち何人かの複數の者が表記を問題視してゐることがわかるのである。投稿規定には「できるだけ」とあり、それがこのやうな强制を示すのか、甚だ不快な疑問を抱かざるを得なかつた。このやうな脅迫狀を頂けば、誰しもが私が抱いたのと同じ不快感を抱くのは當然ではないだらうか。この文章は永久に殘る。それとともに私の人生の記憶に深い傷を永遠に刻んだのである。これはたかが假名遣ではない、私にとつての人格の一部を、現代假名遣の「使用を徹底」せよとの「强い」「複數の」意見でねじ曲げられたことになるのである。

投稿者は採用者に對して常に弱い立場にある。それゆゑものは言ひ樣であるのだ。このやうな文章を送りつける前に、豫め電話で「お願ひ」をするべきではなかつたか。先にも觸れた通り、何が何でも「歷史的假名遣」に執着してゐる譯ではなく、場合によつては讓歩も可能であつた。ただそれなりの納得の出來る理由がなくてはならないのであつて、「できるだけ」と言ふ表記では無理があらう。こちらから電話をして二〇分もかけてその理由を說明して頂いたが、到底納得できるものではなかつた。曰く、學術振興會に認められた學會誌である以上、表記の統一が必要とのことであつたがこれは事實であるのだらうか。また編輯委員の五人中誰が言うたのかを訊いてもこれは答へられないとのことである。五人の中には知る人もある、またお世話になつた方もある。全く知らない五人であるなら構はないが、さうでないゆゑに心の中に猜疑心が殘る始末で後味の實に惡い、快くないものとなつた。

「できるだけ」の中には强制の意味はないのである。もしかすると名譽教授といつた學會の大御所に對してはその表記に關して不問で、私に對しては問題視する爲の「できるだけ」なのかもしれない。今後も(私の)「歷史的假名遣」表記の論考は一切採用しない方針であるといふ。それならば私のやうに不快や不信を抱かせない爲に是非とも投稿規定の「できるだけ」を削除し、「現代假名遣に限る」とすべきである。大御所の大先生が歷史的假名遣で書かれても、私と同じ脅迫狀を突きつけるのでなくてはならない。

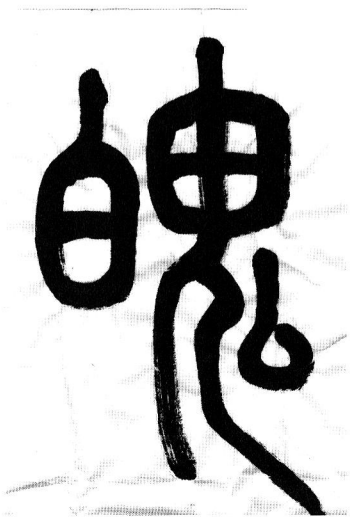
採用に當たり弱い立場である以上、原稿はやむなく「現代假名遣」に書き改めた。自分の手で自分の人格を否定する表記に訂せねばならなかつたことは實に辛いことであつた。何度も言ふが何度も言ふが投稿者は採用者に對して常に弱い立場であるのだ。自分を美化するのではないが、研究に沒頭出來る時間がある學者が書いたものならともかく、高校の教諭がこの激務の內に皎々ととして倦まずに調

査研究してやつと纏めた文である。私の拙い研究の蔭には過去の國學者たちの姿が目に懐かしく浮ぶのであり、それがまた勵みでもあつた。これを自ら葬ることは忍びないものであつたのだ。

實に憤ろしく悲しい出來事であつた。一つは宣長翁にとつてこの上なく申し譯なく、一つには「現代假名遣」の何たるかを顧みずに他に強要して平然としてゐる人物の存在にである。宣長翁は泉下で憤慨なさつておいでであらう。私にはその聲が聞える。

今後同樣に偏向した考へが「學問」といふ名で罷り通り、歴史的假名遣の表記を禁じる動きになることを深く憂へてならない。

（なかざは　のぶひろ・東京都立小岩高等學校教諭　學術博士）



金のさざ波

大喜多俊一

平成十三年睦月、恆例の宮中行事「歌會始の儀」のお題は「草」であった。

天皇・皇后両陛下のお歌をはじめ、草に寄せて詠まれた心の歌は新春を壽ぐのにふさはしく、明るくさはやかな響きに滿ちてゐた。

入選歌十首の中で、殊のほか凛として、深い感銘を受けたのは、三十代女性による懐妊の喜悦を謳つた一首である。

身ごもりて目に入るもののあたらしき
名もなき草の金のさざ波
（神奈川縣・古山智子）

なんといふ澄明な心の目をもつた人なのであらうか。身ごもつた喜びは言葉にあふれ、あたたかいうれし涙が湧きいづる。名もなき草も、金のさざ波とは名状しがたい感動の搖曳である。作者はすでに不安や心配を超えてゐて、再びの至福の時をこのやうに表現することができたのだと思はれる。草は萌え、作者は今、新たな命を授かって、天人に謝する思ひが一入であらう。

命を授かる。尊さこれにまさるものはない。ものみな美しく見える日々、生かされてゐる身をこよなく大切にしたいと祈念する。その思ひのたけを語れば、女性はきつと男性をはるかに凌駕するにちがひない。新たなる命との二人づれは、やがて生れ出づる分身とともに歩む道である。男性のよくするところではない。

とは思ひつつも、ものはみな、二つの要素の合體によつて成り立つ不思議を、何度も確かめて歩むのがこの世の道とは知るところ。親と子、女と男、靜と動、生と死、はては天と地と。世にあるものはなべて二者融合の成果である。

大地に萌える名もなき草々を黄金の波と見る。見るのは輝きの目であり、輝きの目は精氣である。軌を一にして事が成る。人工の道の小理を超えて不思議の道に分け入れば、そこは無限に擴がる大世界、ものみな新しく見える目は自然と心を結ぶ橋である。

歌は自づからそこに成るのであらう。

（おほきたしゆんいち・元京都市教育委員會生徒指導課長）

契沖顯彰短歌大會の近況と今年の歌會始

吉原榮德

契沖研究會は、創立十五年を迎へましたが、契沖顯彰事業の主軸となりました短歌大會は、諸般の事情があつて、第八回を終へた所です。

一般の部はさて置き、兒童・生徒の部で言ひますと、第二回からは、獨自の短歌大會とする爲に、現代に生かす地域の誇り契沖の顯彰、傳統文化（和歌）の繼承、地域文化の振興と言ふ理念を鮮明にし、市內の公立の小・中・高生への參加を呼び掛けました所、早速御理解、御協力を得て、契沖の事蹟についての教育は勿論、歌も千七十人、二千八百五十四首の應募がありました。第四回からは、應募歌の增加により、一人一首としました。第六回には、東京支部の御盡力で、千葉縣船橋市坪井小學校からの參加もあり、指導下さつた校長さんの退職まで續きます。また第七回から、市內の私立校や市外の關大一中や縣立錦城高校の參加もあり、應募者數も九千人を超えます。第八回は、一般人も入れますと、一萬人を超えました。

このやうに、年年、市の教育委員會や校長會、また各學校の現場の先生方のご指導宜しく、量、質共に、他に誇り得るものとなつてきました。

勿論、兒童・生徒の觀察力、想像力、表現力など總合的國語力の向上を期しての事業ですが、公言は控へてゐました。しかし、やがて、市の教育長や教育委員長から、お蔭で、兒童・生徒の國語力が向上しましたと感謝の言葉を頂戴しました。無償の事業とは言へ、實行委員の勇氣付けとなりました。

また、第一席の契沖大賞に選ばれた高校生は、就職試驗で、面接の社長から、その事で絶讚されたと聞いてゐます。

そんな積重ねの中で、本會の短歌大會に應募の爲の作歌初體驗から二年目、關大一中三年生の大西春花さんが全國からの應募歌二萬三百二首中入選者十人と言ふ難關を突破してゐたのです。

昨平成二十二年十二月二十四日（金曜）の朝刊には、「歌會始の儀入選十人決まる」、「入選最年少十四歲伊丹大西さん」とあり、入選歌は「「大丈夫」この言葉だけ言ふ君の不安を最初に氣づいてあげたい」とありました。歌意は、（籠球部員の大西さんが不振に落ちいつてゐた時、友人に相談

をした所)「大丈夫よ」と言ふ言葉を繰返すだけのあなた(友人)の、その言葉の裏に潜(ひそ)む不安感(不振が竝大抵でないと言ふ不安感)を先づ最初に氣附いてあげたいでしたとあります。相手(友人)に對する配慮と言ひますか、倶樂部活動での挫折を通して、自分の事しか考へてゐない己れの未熟さに氣附くと言ふ優しさ、豊な感性が評價されたのでせう。

全國に通用する歌を作れるやうな人の養成と出現とを心から願つてゐますが、それは、偶然の幸運を待つのではなく、成るべくして成るものでなければなりません。そのためには、應募者の層がもつと厚く廣くなければなりません。皆様の一層の御理解と御協力の程を御願ひ致します。

(よしはらよしのり・契沖研究會會長、關西大學名譽教授)



小泉八雲と國語

——假名遣ひ、漢字、健全なナショナリズム

前田哲男

小泉八雲（ラフカディオ・ハーン、Lafcadio Hearn, 1853-1904）は長男一雄の名前を「かづを」と書いたやうだ。八雲生誕百六十年、來日百二十年に當つた昨年の八雲忌、卽ち九月二十六日に熊本の舊居で私はこれを拜見し、國語學的に興味深く思つた。世間には「かづを」と書く名前も「かずを」と書く名前もあり、漢字も色々ある。「かずお」となれば戰後の假名遣ひだらう。假名遣ひに關して、「普通はかう書く」「さう書くのは誤り」等と片づけてしまふと話は簡單だが實際重要な問題を含んでゐる事がある。詳しくは昨年、古田島洋介教授が「歷史的假名遣と舊假名遣を峻別せよ」と喝破なされた（明星大學人文學部日本文化學科 HOMEPAGE 所載「ことばと文化のミニ講座」、Vol.45。なほ同論文の要旨が國語問題協議會報『國語國字』第百九十四號に揭載されてゐる）。

舊臘（きうらふ）には八雲の曾孫に當る小泉凡先生から八雲の英文藏書の exactly とある所に八雲が「チヤウド」と書き込みをした事等映寫機で大映しにして教へて戴き洵に有難かつた（早稻田大學公開シンポジウム「小泉八雲と早稻田大學」、十二月十九日）。

平川祐弘先生は昨年二月、『日本語は生きのびるか』（河出書房新社）と御書きになつたので、私は正直、緣起でもない、との感なしとしなかつた。ポストコロニアリズムや多文化共生などの諸槪念は「肯定といふか禮讚」（同書百三十二頁）するよりも寧ろ、先づその是非を問ふべきではないかと愚考したが、果たせるかな九月、熊本大學で先生は「混淆日本文化は是か非か＝ハーンの周邊文化體驗」と題する講演をされ、曰く、インターナショナリズムは根無し草の國際主義ではなく、健全なナショナリズムの上に築かれてこそ、外國人との對等な會話が可能となる、と、こちらの危惧を拂拭なさつた。當月に尖閣事件あり。翌十月、ドイツのメルケル首相は「多文化共生主義」の失敗を宣言、十一月、ロシアのメドベージェフ大統領は我が北方領土へ不法入國等等、國防や國語の話題に事缺かぬ秋と冬だつた。

會場で配布された資料を御覽になつた方は判るが平川先生は幾つかの正漢字をよく御使ひになつた。例へば、驗の

字は略字の「驗」ではなく正漢字の「驗」、同じく「仮」「混交」でなく夫々「假」「混淆」だつた。因みに驗も假も淆も常用漢字ではない。私は昨年或る人から常用漢字を使つて下さいと言はれたが、斯様に色々な漢字が使はれてゐる現實を先づ直視すべきではないか。日本に來てそれを素直に先づ直視したのが八雲だつた。だから來日第一作『知られぬ日本の面影』(Glimpses of Unfamiliar Japan, 1894) の第一章の一番に書いてある。平川先生は富士山、愛國心、神道、神棚、國旗、國歌、國語、朝日新聞や岩波書店のマインド・コントロール等の諸問題に就て堂々と正論を述べられ、眼にも耳にも訴へる漢字假名交り文の良さ、漢字制限に贊同しない事や漢字教育の重要性にまで御話は及んだ。

八雲は漢字制限に反對した。「醜惡なる實利の爲に創設された」羅馬字會は「敵」だ（前揭書）。當時の國語論爭の一端が窺へて興味深い。高田早苗（早大總長）や森有禮は日本語廢止を提唱した。羅馬字會を創つたのも、八雲を東大に招聘したのも外山正一だ。

それは扨措くとしても「ハーン没後百年」(2004) 等の表記は如何なものか。水死ならいざ知らず人の死を「没」とする書替へは完全に定着した。和室でないと寢られなかつた故仙北谷晃一先生の論文を拜見すれば流石に正しく「歿」の字を御使ひになつてゐる。しかし、幾ら仙北谷先生でも、常用漢字ではないといふ理由により書替へられる事もあつた。昔は逆で、執筆者の崩し字や略字を校正者や印刷所が正漢字に直した。それを思へば平川先生の直筆に崩し字や略字があるのも尚合點が行く。

福田恆存の名著『私の國語教室』が教へてゐるのは、文化にほかならない有機體としての國語國字が、特權階級からの漢字の解放とか「文字の民主化」とかいふ大義名分の下に「改革」されて來たといふ事だ。過去からの斷絶に規範を求めるといふかうした狂信的態度によつて「國語國字改良」が推し進められ、ために正漢字正假名遣ひによつて表はされる考へや感情は時代錯誤的なもの、胡散臭いものといふ受取り方が、國民の間に漠となから形成されるに至つた。（照屋佳男『ジョージ・オーウェル文學と政治』、行人社、昭和六十一年、二百三十四頁―二百三十五頁、中略前田）

風雅の道なしでは、經濟發展はあり得ない。明治時代に小泉八雲の發した言葉、卽ち「將來のこの國の產業的繁榮といへども國民の藝術的感覺の保護育成に俟つところは少なくはない（中略）日本は、その藝術的能力に賴つてこれからも進んでいかねばならぬ」といふ言葉は、現在も生きてゐると思ふ。（照屋佳男「風雅の道の餘力」、荒魂之會『あらたま』第四十六

號、平成十年、十三頁、中略照屋。以上、照屋先生の出典は二つ共に正漢字正假名遣ひ。尚、『へるん』誌（八雲會）では第二十八號から、卽ち平成三年から、仙北谷先生の御書きになつた記事は正假名遣ひから現代假名遣ひに變はつたやうにみえるが、同年に出た『あらたま』第三十二號所載の仙北谷晃一「個を超えた存在への歸依」は依然、正漢字正假名遣ひ。）

正漢字正假名遣ひで尚且つ最近八雲に言擧した文獻としては、前述の古田島教授の師に當る小堀桂一郎東京大學名譽教授の『なぜ日本人は神社にお參りするのか』（海竜社、平成二十一年）がいつもながらの名著だ。正漢字正假名遣ひに贊同する小谷野敦氏は『東大駒場學派物語』（新書館、平成二十一年）の「小堀桂一郎のこだはり」と見出しを附けた所で「小堀には、右翼としての面より嚴しい教師としての面のはうが學生には感じられたが、特に正漢字、正假名遣ひへの拘泥は今なほ強い。ただしこれは正論である。」（百三十三頁）と釘刺し、これは良い。別書で小谷野氏が、平川はウルトラ民族主義者だ何だと攻擊したのに對し、横山孝一氏が反擊したのも良かつた（「平川祐弘氏と世界の中のラフカディオ・ハーン」、八雲會『へるん』第四十七號、平成二十二年）。嘗ての恩師を攻擊する小谷野氏の心を言ふのにLove-Hate Relationshipの語を使つた所が面白い。但しこの語が平川師の研究主題の一である等の基礎知識がなければ一寸面白味がわからないかもしれない。小谷野氏は新年早々、私小說『母子寮前』（文藝春秋、平成二十二年）で芥川賞を取逃したが候補になつただけでも大したものだ。

昨年十一月、明治神宮鎭座九十年大祭の奉祝記念行事として盛大に執り行はれた國際シンポジウム「內と外から見た明治日本」には寬仁親王殿下の第一女子、彬子（あきこ）女王殿下が御出ましになり、平川先生は「靈の國日本―福澤、澁澤、チェンバレン、ハーン」と題して御講演下さり洵に有難く拜聽した。平川先生は神社新報の五月二十四日號に揭載された女王殿下のインタヴュー記事を稱讚した。堂々たる正假名遣ひで書かれたその記事の內容には深い感銘を受けた。六月五日、不覺にもこの記事を讀んでゐなかつた私は教科書改善の會主催第四回日本文明論シンポジウム「日本文明における天皇」（帝京平成大學冲永記念ホール）で平川先生宛に皇統の問題に就て質問狀を差上げたが讀まれる事はなかつた。しかし記事にはその答が全て書いてあつたことになる。〔平成二十三年五月一日〕

（まへだ　てつを・本會會員）

聖書に於る國語問題（其の十一）

――「造られたるもの」と「成りたるもの」――

松岡隆範

ヨハネ傳福音書第一章一節より三節迄。「太初に道あり道は神と偕にあり道は即ち神なり　この道は太初に神と偕に在り　萬物これに由て造らる　造れたる者に一として之に由らで造れしは無」

（明治元譯）

「太初に言あり。言は神と偕にあり、言は神なりき。この言は太初に神とともに在り、萬の物これに由りて成り、成りたる物に一つとして之によらで成りたるはなし。」

（大正改譯）

此の二つの譯の違ひは明治元譯では「造らる」「造れたる者」「造れし」となつてゐる處が大正改譯では「成り」「成りたる物」「成りたる」となつてゐることである。

ブリッジマン・カルバアトソンの漢譯聖書では

「萬物爲道所造凡受造者無不由之而造焉」

英語の聖書ではどうだらうか。

All things were made by him; and without him was not any thing made that was made.

（欽定英譯 A.V.）

All things were made through him, and without him was not anything made that was made.

（改定標準譯　R.S.V.）

All things came into being, through him, and without him not one thing came into being.（新改定標準譯　N.R.S.V.）

Through him God made all things, not one thing in all creation was made without him.

[Good News Bible.(Today's English Version)]

欽定英譯も改定標準譯もグッドニュウズ　バイブルも made（造る）と譯し、新改定標準のみ　came into being（成る）と譯してゐる。

「造らる」と「成る」とでは意味が異る。

「造らる」はすべては神により造られたものであると云ふ信仰から生ずる言葉であり、「成る」は自然に生成されたと云ふ意味である。

聖書はキリスト教の正典である。コイネギリシャ語の原典から飜譯するに當つては單に語學的に正確であるのみならず教義的に神學的に正しい解釋によらなければならない。ギリシャ語のEgeneto（造る）が假に「成る」とも譯し得るとしても「造る」と譯すべきであらう。

此の觀點からすれば大正改譯は誤譯とすべきであらう。N.R.S.V. のcame into beingも問題があると云ふべきであらう。

此の誤譯は其後日本の「口語譯聖書」「新共同譯聖書」に引繼がれてゐる。即ち今日の日本のキリスト教會はすべて「成る」の聖書を用ゐてゐるのである。

英語の聖書でも"came into being"は、"came into being"、"came into existence"等の形で近代のアメリカ聖書が受繼いでゐる。

明治もと譯がmade（つくらる）に從つてゐるのは勿論欽定英譯其他の古い英譯聖書に從つたからであるが「つくる」に「作」でも「創」でもなく「造」を用ゐたのは漢譯聖書を參考にしたからかも知れない。

中世のカトリック教會はウルガアタラテン譯の聖書を正典とし、聖書の各國語への飜譯を嚴禁した。此の禁を犯して聖書飜譯をした者は處刑された。

何故飜譯を禁じたのか。飜譯とは解釋だからである。教義的、神學的に誤つた解釋がなされる事をおそれたからである。

「造られたるもの」と「成りたるもの」の違ひが重大な問題とされるのは以上述べた理由によるのである。

（まつをか　たかのり　平成二十三年五月記　本會理事、彫刻家）

假名字母の制限

上西俊雄

漢字制限に對する批判の聲が高まりつつある。たとへば日本經濟新聞（平成二十三年一月三十一日）におけるクラレ會長和久井康明氏の主張もその例だ。しかし假名字母の制限に對する批判の聲を聽くことはない。

毎日新聞「戰後六十年の原點」（平成十八年四月八日）はGHQには日本語をローマ字化する意圖があったのを漢字制限によって阻止したとする捉へ方であって和久井氏の捉へ方とは逆だ。事實はどうであれ、私には和久井氏の捉へ方が眞實に近いやうに思はれる。

J・マーシャル・アンガー著『占領下日本の表記改革』によれば海軍豫備部隊少佐ロバート・キング・ホール・ヂュニアがローマ字化の意圖をもってゐたことは確かだ。しかし彼ははじめ片假名表記を考へてゐたとある。片假名にしろローマ字にしろ、ホールが表記改革をすべきだとする第一の目的は戰前の軍國主義的文獻を日本人の目につきにくくすることであったのだから、假名字母の制限こそ一番簡單な方法であっただらう。ホールの戰術轉換を見ずにローマ字化のことだけを見てGHQの意圖をくぢいたと考へるのは間が抜けてゐる。五十音圖の破壞などホール自身では思ひつきさうにない惡魔的な方法であり、單に戰前のプロパガンダを閉出すはずのものが萬葉から敗戰時までのすべてのものを閉出してしまったのだ。あまつさへ、そのことが成果であるかのやうに語られはじめてゐる。

漢字制限も假名字母制限も戰前から表音主義者の追求したことであった。もしGHQのせゐであるのであればもうGHQは無いのだから、遠慮せずに制限を撤廢すればよいではないか。さうならないのは表音主義がまだ力をもってゐるからだ。表音主義者は言語は變化するものであり、假名であれローマ字であれ、その時代時代の音韻に從ふべきだとする。明治期に構想されたローマ字で書分けられてゐない音韻を假名で書分けることは間違ひだとされたのだ。

鹽谷贊『幸田露伴』によれば露伴は昭和二年のころ「おうもり」といふ文を書いてゐる。

久し振りの外出に露伴は快かった。驛名を示す札に「おうもり」とある。大森は「おほもり」であって斷固として「おうもり」ではない。「おほ」と書いて「おお」あるいは「おー」と讀ませるのは韻が同じだから自然にさうなる道理である。「おう」を「おお」と讀む自然の理はなく、さう讀むといふ約束があってさう讀むのである。（中略）いつたい「おう」と書いて「おお」と讀ませようとする料簡の奥には音便のことが存するのである。音便では「おう」を「おお」と讀むことも多い。しかしそれはさう教育されてゐるからさう讀むのである。それなら同じ手數で「おほ」を「おお」と讀ませるやうに教へておいたらよい。「おう」を以て「おほ」に變へるには及ばない。便利便利と便利ばかりを尊がって國語の混濁を來さうとする傾向は承知できない。「ず」と「づ」とは同じだからと一方を廢して、出たのか出ないのかわからない「出ず」といふ書きやうをし、地圖の字に「ちづ」と振假名した生徒を叱ることになった。そのくせ英語の綴りは發音通りに書いてはいけなくて正確を期してゐる。個人でこの主義を奉ずるものはまだ許せるが、教育の看板をかけたところや官府までが國語を混亂させようといふのは、この暴擧に對して何も言はない識者とともに非である。自分がここに辯ずるのは鐵道省や一大森驛のためではない。

戰後の文部省式表記では「おおもり」であつて「おうもり」ではない。いづれにしても「おほもり」といふ傳統的綴りでないといふ點で、すなはちア行音に讀むホといふ字母を使用してゐないといふ點で假名字母制限表記なのだ。もし文部省式表記も方式として假名遣と呼ぶべきものであるのなら、「おおもり」か「おうもり」かのいづれかでなければならないはずだが、文部省式はかうだと單純にいふことができない場合が多い。稻妻はイナズマが本則でイナヅマが許容だとするやうなものから、「おおもり」のやうに傳統的假名遣が「おほもり」であることを知らなければ、つい「おうもり」と書いてしまふやうな方式まであつて、音に從ふといふ原則で貫かれてゐるわけではない。現代假名遣で書くことを求める新聞社や出版社にしても、「おほもり」が文部省式でないことにはすぐに氣がつくとしても、「おうもり」だとそのまま罷りとほってしまふだらう。だから假名字母制限表記と否定的に規定するのが實際的だ。さう規定してみるとカタカナの場合の問題も同一であることが判る。「必要だ」といふとき、「needs がある」といふ人があるが大抵はニーズと書く。英語の音からすれば語末の -s 葉は齒擦音つまりダ行音だから英語の先生ならニーズと書くべきところ。どうして

こんなことになったのか。

ヘボンは最初ズヅを dz で表はし、ジヂを j で表はしてゐた。dz はダ行音。英語における j の音は發音記號で書けば d͡ʒ だから、これもダ行音だ。ヘボンはズヅはヅに收斂し、ジヂはヂに收斂したと觀てゐたわけだ。表音主義者の主張の通り、同一の音は同じ假名で書くべきだとするならジヂはヂ、ズヅはヅとすべきであつた。ローマ字でジヂを ji とし、ズヅを zu と英語音としては襷掛けにしたのは短い方を選んだからかもしれない。「おおもり」「おうもり」もジヂ・ズヅもローマ字で書けば吸收される違ひと踏んだのであらうが、ジヂ・ズヅについてなぜボタンを掛け違つたか。

『學問のすすめ』にミッズルカラッスとあつた。國會圖書館の畫像データーでしらべてみるとミッヅルカラッス。諭吉は middle class の middle をミッヅルと轉寫してゐたのだ。露伴は Dickens をヂケンズと書いた。つまり、戰前は今であればディとすべきところをヂとし、ドゥとすべきところをヅと書くことが行なはれた。だから major measure をメヂャー、メジャーと書分けるわけにはいかない。しかし、今のやうに英語が流入してくれば his kids をヒズ キッヅと書分けられないのは不便。英語教育の效率が惡いのも、日頃、アルファベットの音價の違ひを殺すやうに訓練してゐるからだ。

今やディやドゥといふ表記で國語音韻に本來屬さない音韻を書分ける時代、ヂやヅが開放されたにも關らず傳統的國語音韻にあった區別を書分けないのは表音式表記ではない。假名字母制限表記と呼ぶ所以。

（かみにし　としを・擴張ヘボン式提唱者、本會評議員）

東日本大震災鎭魂の歌

安東路翠（東久留米市）

めぐりゆき青き地球の都市の風異邦の朝もかくも清しき
歴史ある青き地球を守りゆく智慧の築ける爐の火なれるに
庭に巢くふシベリアよりの渡り鳥何を思ふや懷きて往かず

市川浩（川崎市）

千古より三陸襲ふ津波にもかほどの瓦礫誰か見つらむ
嫗說く津波に命てんでんこ家喪ふも身を全うす
原子力發電所にぞ基礎的の冷却不能心殘れる
避難所に長引き暮す映像に明るさ與ふ健氣の詞

稻葉和子（大阪市）

東國に住むなとばかり苛酷なる災害續く春風吹くに
失へる人を搜すと呼ぶ聲を掻き消して行く廢墟吹く風
東西に分れはをれど震災に日本は一つと思ひ知らさる

井上寶護（廣島市）

いつの日かこの事あるを豫期せるに現に言葉出でぬ悲しさ
大臣らが周章狼狽さわぐかしましさ玉の御聲にしづまりて見ゆ
千年に一度の禍に耐へてみむ草莽われら試されてあり

大石健一（熊本縣）

目をとぢて筑紫の地より祈るなりまたよみがへれみちのくの國
住みなれし里を追はれて假の屋に飯くふ小嫗何をしぞ思ふ
耐へよかしをはることなき悲しみをかかへて生くることになるとも

桂重俊（仙臺市）

父母と姉妻長男死去せりと地震津波の訃報續くも
「避難を」と叫び續けて自らは未希子觀音波に消えたり

高橋央尙（横濱市）

被災地に雪ふるおとをそらに聞きよもつひらさかすみれ咲きしか
海市にはあらず陸にも船とどめ春沈默の福島悲し
老われは大和島根の復興にこころ寄すほかすべなきものを

竹村晴子（兵庫縣）

大津波ただ破壞して今朝の海常の顏して朝を凪ぎをり
海溢れわが子の行方知れぬまま一本の祈念樹花芽ふくらむ
大津波老婆のメディアに應へをりナイアガラの瀧我に迫りしと

中澤伸弘（東京都）

神代より言ひつがひけり海山もよりて仕ふる御代にあらめや
いくたびの國難こえて悠久の歷史たもてる國柄に生く
すめろぎのおほみこころをいただきてひとつとなりて榮え來し國

竹內　孝彥（習志野市）

悲しみのなかに笑まふる民の上に玉の御言をかけたまひたり
すめらぎの御幸（みゆき）したまふ道奥に櫻前線北上したる
いでましの后の宮に野水仙捧げまつれる女（をみな）ありけり

松岡隆範（東久留米市）

なゐつなみ　すくはれがたき　こころみを　なにゆゑ神はあたへたまふや

谷田貝常夫（東京都）

鎌倉の大銀杏樹のたふれしは山裂け海褪（あ）する兆（きざし）なりしか
三陸の慘禍の影を宿せるか今年のさくら凄氣帶びたり
災害の合間生き拔く日本人地震（なゐ）にも神をかしこしとするか
五大みな響きありとふ敷衍せば波動（ひびき）ならずや地震（なゐ）も津波も
千歲經（ちとせへ）て仆（たふ）れし銀杏蘗（ひこば）えて後の千載生き拔かむとす

山田喜弘（大阪市）

松島やああ松島やと謳はれし美しき地をとり戻さなむ
一からの出直しなりと朗かに語るをみなの聲ぞ頼もし
迫り來る津波避けよと人々に告げし乙女の生命（いのち）尊し

橫地末次郎（四街道市）

空讀（そらよみ）の敎育敕語六十七年（むそな）忘れ果てしに又目指す空（そら）
三十一年（みそひとぜ）前硫黃島で合掌せし議員皆逝く熱き壕思ふ
樺太に斃れし電話交換手津波知らする女子と重なる
津波來ると鐘鳴し若き消防士をさなご二人殘し逝くかや

巖島（朝日夕日傳説の『猿田彦大神』）

安東　路翠

朝日射し草萌の中聖像は夕日に翳り幻となる

晝の月記紀の言の葉生き生きと島を塞ぎて巖しく屏てり

正史より消えてありしを毘古神を舞はせ給ひしこたびも笛に

大穴牟遲神少彦名神の大岩のいはれも云はず夏陽に立てり

塞の神正史を辟けし無欲なる國ツ神なり記される如

繩文のまつろはぬとて言ひ擧ぐる海より來たる日ノ神の御祖

月影に岩隱る身は枝にゆらぎ見えねば床し古き魂

謙遜の美德とせらる佐田比古は見ざる云はざる聞かざるとなす

服すにはあらず裔なる我が民は安寧にあり安藝のくにはら

瀨戸海の底ひ深かり岩に彫る大古の神は安らぎて立つ

天地を和せる神なり上古よりよぎるおもひは永くあれども

啓蟄の光に照りて春の晝休みてあるや影すらもなし

いにしへを映し蠢く石の像見えぬものこそ明らけくあり

薄皮をはがせる如く浮かび來る出雲の神の御正體たり

傳へ無く記憶の合間に隱せるも我は永劫の土の神也

霽れゆけば崖の岩屋に鼻太く眼光強き白髮の巨像

天地の剖判し時ゆ隱身の常立の神岬攫ぎる

七ツ浦に一ツ足せりといにしへの古書に記せり塞の聖像

もはや今は隱す事なし猿田(さだ)の神春の夕陽に翔(かけ)りて舞へり

添へ歌

記紀よりの瑞波(みづは)の神は清げなる今の社(やしろ)を梅で飾れる

（あんどう　ろすい・本會評議員）

東日本大震災鎭魂の歌

吉原榮德（豐中市）

被災する前よりも良き街作ると子らの元氣な言に明日見る

常のごと名所の夕日津の波に廢墟となりし海邊染め居ぬ

褐色の廢墟に眩し一筋の春の小川の岸の蒲公英

後書

未曾有をミゾウユウと讀んで首相の座を追はれることになり、想定外と言つて何を今更と非難されるといつたことから見られるやうに、この種の語彙の多用される昨今の社會狀況と言へさうです。地球が己れのひづみを絶えず修正してゐるそのとばつちりを、特に日本が强く受けてゐるのが無念に思はれ、一方そのことが日本人の自然觀を養つてきたのかとも推し量れます。

今年三月の震災には多くの方から多額の義捐金が寄せられたやうですが、その寄託先の日本赤十字は未だにその配分がまともには出來ないでゐるやうです。我々財布のとぼしい協議會としては、ともかく、日本人の魂を搖さぶる和歌の力で、微力ながら亡くなつた人達の鎭魂と復興の祈念をしようと、會員から和歌を募集したところ、歌を詠むのは始めてといふ人までが、止むにやまれぬ心情から應募されました。

本村久郎さんは、防衛大學、航空自衛隊幹部學校などで教育部長を勤めるなど、長いこと國語を教へながら、自衛隊幹部に國語を通じて日本を愛する心を養つてこられましたので、その體驗からの幅廣い教養に裏付けられた話をし

てくださいました。田部井文雄千葉大名譽教授には、「交ぜ書き語追放」の話をしていただきましたが、既に『「完璧」はなぜ「完ぺき」と書くのか』と言ふ本を出されてをり、雜誌「致知」にも同じことを書かれてゐるので、今回の話の內容は割愛することになりましたが、昨年十一月に、內閣總理大臣菅直人名により告示された常用漢字表に完璧の璧が入つたのは、何か影響があつたのでせうか。

全日本かるた協會の專任讀手の稻葉修至七段に和歌の讀みについて體驗からくる講演をしていただきました。百人一首はさかんですが、かるたの讀みあげがほとんどまともに出來てゐません。本格的な百人一首の讀上げCDは稻葉さんのものとの定評があるやうですが、果せるかな、歌の讀みは歷史的假名遣によらなくてはならないとの結論でした。その講演に先立つて日本かるた協會の方々に小倉百人一首競技の實演をしていただきましたが、お蔭で、和服姿の女性が多く集つた、かつてなく華やかな講演會になりました。

「前科一犯の佐藤優です」と笑ひをとつて話を起した佐藤優氏は、時代の寵兒といへるほどの活躍をされてゐること、ご存じの通りです。國際政治に於てはインテリジェンス（情報）が大切だと、外務省內にその部署を新設した岡崎久彥元泰大使の御紹介による佐藤さんは、ロシア、東歐の情報に關して拔群の實力を持たれてゐますが、外務省では折合がよくは行かなかつたのでせう。今外務省が外交上幾多の齟齬をきたしてゐるのを見てゐるだけに、まことに有用な人材を失つたことは遺憾です。元々本協議會の存在を教へられたのは氏の語學の師半田一郎氏からでした。この天才的語學者が昨年交通事故で亡くなられました。ここにあらためて冥福をお祈りします。本協議會は國語そのものの問題と共に、國體論を取上げてゐることにもなるといふ觀點から、佐藤さんはわれわれの活動を評價してゐるとのこと、嬉しくもあり、こそばゆくも感じます。

「国語を考える議員懇談会（通稱國語議連）」では、五十音圖の「ゐ、ゑ」の穴空き、君が代の「いわおとなりて」の現代假名遣使用につき、「正かなづかひの會」の山本卓事務局長が十分な資料を用意して論理的に問題を解明する勉強會を開きました。文部科學省、文化廳のみでなく、內閣府まで呼び、役人の好きな言葉「政府」に大きな影響を與へてゐます。この勢が持續すれば、一寸先は闇の政界であつても、正常化が實現するものと信じられます。

事務局長　谷田貝常夫

平成二十三年七月一日発行

創刊昭和三十五年十二月一日（通巻百九十五号）

編集・発行　国語問題協議会

東京都大田区久ケ原三丁目二十四の六
郵便番号　一四六―〇〇八五
電話　〇八〇―三四一一―五五〇一
電信　〇三―三七五三―一四二九
電郵　yatagaik@f03.itscom.net
URL:http://kokumonkyo.jp/